



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター

年次報告書 2025

Annual Report 2025

未来共創センターとは？

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。人間科学部・研究科の掲げる「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年4月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、2025年度では26の協定が結ばれています。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOSによる連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。OOSが創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。

多様な活動を通して 社会への貢献をめざします

オリジナリティあふれる多様な活動を発信し社会貢献をめざしています。

◇人間科学セミナー／出張授業

大学内で、または大学の外で、人間科学の教員が研究成果を発信するセミナーや講義をしています。

◇『シリーズ人間科学』の発刊

研究内容を一般にも分かりやすく発信する本として、人科の教員がテーマに合わせて共同で執筆しています。これまでに「食べる」「助ける」「感じる」「学ぶ・教える」「病む」「越える・超える」「争う」「住む・棲む」の8冊が発刊されています。

◇ジャーナル『未来共創』の発刊

最新の研究や活動報告をまとめたオンラインジャーナルを、年1回発刊します。

◇研究会の運営

年間のテーマを定めた研究会を実施しており、2020年度は「レジリエンス」、2021年度は「教育と格差」、2022年度は「人口減少への共創的アプローチ」、2023年度は「学際的研究として挑む「月経」」、2024年度は「「社会学共創」への共創的アプローチ」、2025年度は「人間と環境」をテーマに、多分野の教員・学生が議論を重ねました。この研究会からの成果は特集論文として、ジャーナル『未来共創』を通じて発信しています。

大学らしい「共創の場」から 共創知をうみだします

大学における学びや研究を充実させ、多様なアクターとともに新しい「知」をうみだします。

◇OOS 協定

産官社会学連携により、人間科学の教員とパートナーとともに、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします。

◇オープン・プロジェクト

学系間および他部局との協働を推進し、本研究科と社会の結節点としての社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育活動を図るために設置されました。現在、31のプロジェクトが展開され、さまざまな社会との結び目をつくり、あたらしい場をつくっています。

◇学生プロジェクト

学生の自由で、独創的な発想に基づく学際性のある社会との共創的なイベント、活動を支援しています。学系を超えた交流会の開催など、学生ならではのプロジェクトが展開されています。

目 次

はじめに	1
I 未来共創センターの概要	
1 設立の経緯と背景	2
2 活動目的と概要	3
3 運営体制	3
II 活動報告	
1 センター主催等のイベント	
1.1 人間科学セミナー	4
1.2 学生企画によるプロジェクト	13
1.3 その他のイベント等	25
2 大阪大学オムニサイト協定（OOS協定）	
2.1 大阪大学オムニサイト（OOS） 協定先一覧（2025年）	32
2.2 OOS 関連イベント	34
2.3 OOS 協定シンポジウム	37
3 未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト	
3.1 未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトの活動	40
4 研究事業	
4.1 研究会	63
4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊	64
5 教育事業	
5.1 未来共創センター担当授業	65
5.2 『私の一冊』の発刊	65

はじめに

未来共創センターは、大学から社会のほうへとせりだした「フロントライン」に位置しています。この場所に立ち、学外の多様な人々と交わることは、大学の内側にいるだけでは決して見えない、ありありとまざまざとした社会の現実と、そこに満ちる不思議や驚きに直面することを意味します。

2025年度、当センターはOU マスタープラン実現加速事業「Project IMPACT」の強力な後押しを受けて、IMPACT オープンプロジェクトを中心に、社会学共創活動をさらに一段高いレベルへと推進してきました。新たな OOS 協定の締結をはじめ、本報告書に掲載された数々の社会的実践は、ひとえにご協力いただいたみなさまとの共創の賜物です。

私自身、この2年間のセンター長の任期を通じて、これまでの研究室生活では得られなかった大きな活力と、視野の刷新を経験しました。内側ばかりを見ていては外の変化に気づかず、外ばかり見ていては身近な人々の思いを取りこぼす。だからこそ私たちは、意識的にこのフロントラインへと足を運び、視野を切り替え続けねばなりません。

変化の激しい現代社会において、未来共創センターがこれからもみなさまと共に明るい未来を切り拓く場であり続けることを願っています。今後ともセンターへの変わらぬご支援とご参画を、どうぞよろしくお願いいたします。

附属未来共創センター
センター長 西森 年寿



1 設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（1学系：グローバル人間学系）の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そこで、2016年に本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻のなかに、行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系の4学系としました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」が加わりました。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、2016年の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」が設置されました。

そして2022年には、人間科学部は創立50周年を迎えています。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター

2 活動目的と概要

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーや研究会、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することや、センターに関わる各種のプロジェクトの企画運営に参画することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を目指しています。

3 運営体制

《未来共創センター構成員》

未来共創センター

西 森 年 寿 教授 [センター長] (兼)

宮 本 匠 准教授 [副センター長] (兼)

杉 本 めぐみ 准教授

高 田 一 宏 教授 (兼)

白 川 千 尋 教授 (兼)

稲 場 圭 信 教授 (兼)

勝 野 史子 講師 (兼)

石 塚 裕 子 招へい教授

上 野 隆 弘 特任研究員

1 センター主催等のイベント

◆1.1 人間科学セミナー

大阪大学人間科学研究科の教員らによるセミナーで、一般にも広く公開しています。今年度は、第85回から第102回までの18回のセミナーが開催されました。

日付	時間	タイトル	講演者	場 所
2025 年 4 月10日 5 月 8 日 6 月 5 日 7 月10日 8 月 7 日 10 月 2 日 11 月 6 日 12 月 4 日 2026 年 1 月 8 日 2 月 5 日 3 月12日		第85, 86, 87, 90, 91, 94, 96, 98, 99, 101, 102 回 人間科学セミナー	仁科 国之 直原 康光 石田 海 福島 健太郎 安富 祐人 木村 司（人間科学研究科） 畑 佑美（関西学院大学） 前田 友吾（玉川大学）	インターナショナル カフェ
2025 年 6 月12日	13:30ー 15:00	第88回 人間科学セミナー 新任の先生の研究紹介	佐藤 桃子 萩原 広道 西村 剛（人間科学研究科）	ラーニングコモンズ
2025 年 7 月10日	13:30ー 15:00	第89回 人間科学セミナー 新任の先生の研究紹介	高田 紗英子 松村 一志 丸山 真央（人間科学研究科）	ラーニングコモンズ
2025 年 9 月18日	13:30ー 15:00	第92回 人間科学セミナー 新任の先生の研究紹介	齋藤 僚介 藤野 陽生 福田 雄（人間科学研究科）	ラーニングコモンズ
2025 年 10 月 2 日	13:30ー 15:00	第93回 人間科学セミナー 新任の先生の研究紹介	鈴木 和歌奈 木村 司 伊東 さなえ（人間科学研究科）	ラーニングコモンズ
2025 年 10 月16日	13:30ー 15:00	第95回 人間科学セミナー 比較認知科学から見る ベブースキーマ	川口 ゆり （ノッティンガムトレント大学）	ラーニングコモンズ ＋ オンライン
2025 年 11月20日	9:00ー 12:00	第97回 人間科学セミナー 人間科学における 計量テキスト分析	樋口 耕一（立命館大学）	キャノピーホール
2026 年 2 月 5 日	10:00ー 12:00	第100回 人間科学セミナー 大阪大学における社会調査 法研究の 40 年：調査計量 の発展と現状	吉川 徹（人間科学研究科）	キャノピーホール

行動学系若手セミナーシリーズ

開催場所 人間科学研究科 インターナショナルカフェ

主催 行動学系若手セミナーシリーズ実行委員会

共催 行動学系・未来共創センター・IMPACT

<要旨>

2024 年度より立ち上げた「行動学系若手セミナーシリーズ」。今年度は 11 回にわたってセミナーを実施しました。昨年度と同様に、「新任教員研修プログラム」(研究能力開発プログラム)としても参加できるよう体制を整えました。各回において、若手教員や大学院生を中心にご登壇いただき、幅広いテーマでトークしていただきました。

今年度は、学外の研究者をお招きしたり、コーヒーサロンを実施したり、大学院生発案企画を開催したりと、昨年度よりもさらに企画内容を充実させることができました。毎回、質疑や議論も活発で、セミナー終了後も登壇者と参加者との間で延長戦が繰り広げられることもしばしばありました。参加者数はのべ 160 名を超え、研究科内での若手研究者同士の交流の場として、いっそう定着してきたと感じています。

新任教員研修プログラムとしての役割は一定果たしたと考え、次年度はさらに体制を変えつつ、継続的に実施していく予定です。ぜひお気軽にご参加いただければと思います。

<トークテーマ>

- 第 11 回 コーヒーサロン (研究雑談会)
- 第 12 回 いままでとこれからの研究：信頼、サイコパシー研究の両輪から
- 第 13 回 発達心理学の観点からみた離婚後の家族と子どもの理解：キャリア、研究・実践のつながりを踏まえて (大学院生発案企画、発達心理学会若手分科会との共催)
- 第 14 回 心理学者の頭のなかは、どう違う？：Sulik et al. (2025) をもとに各研究分野の違いを語り合いましょ！ (大学院生発案企画)
- 第 15 回 自由エネルギー原理と音楽の心理学
- 第 16 回 形成的評価のための教育測定手法：多枝選択項目のための診断分類モデル
- 第 17 回 コーヒーサロン (研究雑談会)
- 第 18 回 ヒトの体幹形態と運動の進化
- 第 19 回 習慣化における行動の構造 & 典型ではない研究者キャリアの一事例
- 第 20 回 関係流動性と心の多様性：社会への「適応」とそのミッシングリンク
- 第 21 回 心電図を「正しく」測る：「正しく」測るとは？



会場の様子



第12回：仁科 国之 氏 (社会心理学・助教)



第13回：直原 康光 氏 (教育心理学・講師)



第14回：社会心理学研究室 有志



第15回：石田 海 氏（基礎心理学・助教）



第16回：福島 健太郎 氏（行動統計科学・助教）



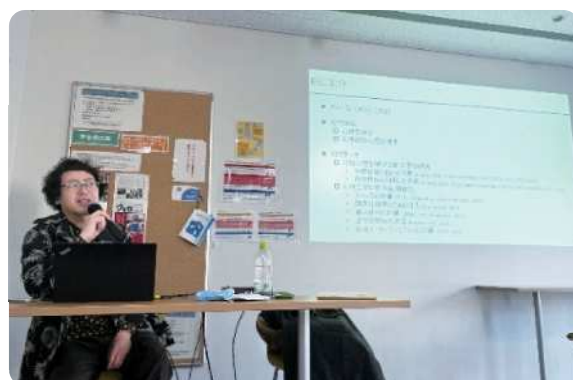
第18回：安富 祐人 氏（生物人類学・博士後期課程）



第19回：畑 佑美 氏（関西学院大学・非常勤講師）



第20回：前田 友吾 氏（玉川大学・嘱託研究員）



第21回：木村 司 氏（応用認知心理学・講師）

デンマークに学ぶ子ども家庭福祉

講演者 佐藤 桃子 / 共生学系 コミュニティ学講座

<要旨>

子どもたちを取り巻く福祉は、現在の日本社会では大きな変化の只中にあります。こども基本法成立、こども家庭庁の設立によって、子どもの権利についての意識が高まり、子どもの声を聴くことを重視した法整備がされるようになりました。社会福祉制度やソーシャルワーク（相談援助）実践の在り方は国によって、また時代によっても異なります。今回のお話では、日本の福祉課題に焦点を置きつつ、北欧の福祉国家デンマークではどのような子ども家庭福祉が行われているのかをご紹介しますと思います。デンマークは子どもの権利を重視する国で、教育費は大学院まで無料、育児休業などの子育て支援政策も充実しています。たとえば支援が必要な子どもに対するミクロな福祉実践では、どのように子どもの権利を尊重した実践が行われているのか、そしてそれは日本と違うのかどうか…。デンマークのソーシャルワーカー達への調査をもとにご報告します。



ことばの発達の不思議：世界の認識をつくる子ども、子どもによって関わりを変える大人

講演者 萩原 広道 / 行動学系 行動生態学講座

<要旨>

みなさんは、自分がどうやって言葉を身につけてきたか、おぼえていますか？言葉をおぼえる過程には、さまざまな不思議が詰まっています。ハンカチのことを「鼻」と言う、鉄棒を「ブランコ」と呼ぶ、「疲れた！」と言う子どもに「じゃあ走ろっか」と返したら走る、などなど…。本講演では、そんな大人のリクツとはちょっと違う、子ども独自のことばの世界とその発達について、発達認知科学の立場からご紹介します。さらに、近年の研究から、子どもの様子や発達の状況に応じて、養育者は子どもへの関わり方を柔軟に調整していることが明らかになってきています。ことばの発達というプロジェクトに参加する大人の「ファインプレー」についても、最新の知見をご紹介しますと思います。子どもの頭のなかで、または子どもを取り巻く社会的環境でどんな変化が起こっているのか、目を凝らしてみないとわからない発達の「舞台裏」を一緒にめぐってみましょう！



ヒトの言語進化をサルに問ふ

講演者 西村 剛 / 行動学系 行動生態学講座

<要旨>

ヒトは、言語を持つ唯一の存在です。ヒトは多様な音素を連ねて会話しますが、ヒト以外の霊長類（サル類）にはできません。その会話を成立させるには、声帯を長く安定して振動させる必要があります。サル類の声帯には声帯膜という付加構造があるのに対して、ヒトではそれがありません。声帯膜があると、声帯振動が不安定になりやすいことがわかりました。つまり、声帯膜の喪失という解剖学的な単純化が、ヒトの複雑な音声行動の進化をもたらしたと言えます。この研究で使用したサル類 43 種の標本は、50 年以上もの歳月を経て受け継がれてきたものです。また、チンパンジーの声帯振動の観察データは、先人が残してくれた遺産です。何の気なしに行った在外研究先での出会いがなければ、声帯の形態解析や振動実験をすることもなかったでしょう。別々に走っていた共同研究がとある偶然から一つに結実していく様子を語りながら、私たちの研究のありようを紹介します。



「困った行動」の向こうにあるもの

—トラウマを見立て、つなぐ支援としてのトラウマインフォームドケア

講演者 高田 紗英子 / 公認心理師プログラム運営室

<要旨>

子どもたちの「問題」とされる行動や多様な症状の背景には、しばしば語られなかったトラウマ体験や、関係性の傷つきが潜んでいます。こうした背景を見立て、ケアしていく視点として注目されているのが、トラウマインフォームドケア（TIC）です。TIC では、子どもが安心・安全を感じられる関係性の構築が土台となります。今回のお話では、児童福祉の現場における TIC 実践の必要性和、それを支える「トラウマ・コンピテンシー」について、全国調査による量的データと、支援職の語りに基づく質的知見をもとにご紹介します。また、当事者である子ども自身への支援として、信頼の回復を土台としたトラウマインフォームドなアセスメントのあり方についても、臨床実践を通して考察します。支援する側・される側の双方が「脅威にならない関係性」の中で力を取り戻すために、何が必要なのかを考えていきたいと思います。



科学にとって「証拠」とは何か — 社会学と科学史の交差点から

講演者 松村 一志 / 社会学・人間学系 社会環境学講座

<要旨>

近年、「エビデンス」という言葉が一種の流行語になっています。では、「根拠」や「証拠」といった言葉があるにもかかわらず、「エビデンス」というカタカナ語が使われているのはなぜなのでしょう。報告者は、「エビデンス」概念の出現を、より広い「科学的証拠」の歴史に位置づけることで、この問題にアプローチしてきました。こうした研究の背景には、1980 年代以降の科学技術社会論（STS）で発達した社会学と科学史を横断する研究群があります。それらは、「事実」や「客観性」といった認識論的概念と、それに関わる科学的実践の歴史を分析してきました。つまり、科学的知識の内容だけでなく、真偽を判定する手続きそれ自体の変化にまで関心が向けられるようになったのです。本報告では、報告者自身の研究に加え、こうした観点も紹介しながら、科学的知識をめぐる混乱が見られる今日の状況をよりよく見通すための手がかりを提供したいと思います。



メガイベントと都市の社会学 — 2025 年大阪・関西万博を中心に

講演者 丸山 真央 / 社会学・人間学系 社会環境学講座

<要旨>

オリンピックや万国（国際）博覧会などの国際的な大規模イベントは「メガイベント」と呼ばれ、近年、ツーリズム、文化、経営など様々な分野により学際的に研究が進められています。そもそもなぜメガイベントは開催されるのでしょうか。誰が開催したがつているのでしょうか。後にどのようなレガシーが残るのでしょうか。こうした問いに、メガイベント研究の中でも特に（都市）社会学が関心をもって取り組んでいます。この報告では、目下開催中の大阪・関西万博を例に、報告者の調査を中心に紹介しながら、メガイベントと都市との関係を考えます。メガイベントは今、転機にあるといわれており、欧米では立候補する都市や国が減ったり、住民投票で招致を取りやめたりするケースが相次いでいます。それに対して東アジアは中近東と並んでメガイベントのホットスポットになっています。今後、私たちはメガイベントにどう向きあえばよいのでしょうか。そんなことを考える機会になればと思います。



ナショナリズムとミクロ・マクロ・リンク

講演者 齋藤 僚介 / 社会学・人間学系 社会環境学講座



<要旨>

「日本人ファースト」を標榜する参政党の躍進は、どのような社会状況や権力関係のもとで起こったのでしょうか。このようなマクロな社会レベルの現象の説明は社会学における最重要課題の一つとされてきました。この問いを明らかにするために用いられてきた視座としてミクロ・マクロ・リンクというものがあります。この視座ではマクロな現象をミクロな個人の選択を通じて説明しようとしています。本報告では、これまでの発表者のナショナリズムに関する研究を社会学における重要な視座であるミクロ・マクロ・リンクに位置付け、社会状況や社会的権力関係と排外主義的集合行為や極右台頭（マクロレベルでの現象）の関係を個人のナショナリズムと合理的選択（ミクロレベルの現象）の関係の説明を試みます。発表者の研究は「在日特権を許さない市民の会」やネット右翼を念頭に置いた研究でしたが、そこから議論を進め、今回の参政党躍進について考えたいと思います。

人と生きる：障害と病気、親と子の育ち

講演者 藤野 陽生 / 教育学系 臨床教育学講座



<要旨>

人と生きていくことは、とても大切なことです。しかし、私たちが生きていく上では、さまざまな障害があります。みなさんは、障害という何を思い浮かべるでしょうか？小さなことから大きなものまでさまざまですが、何らかの問題によって、生活を送ることや、人と関わりを持つことが難しくなってしまふことがあります。発達障害は、環境への適応や他者とのコミュニケーションで問題を抱えるために生活していくうえでの困難があったり、筋ジストロフィーという病気では、筋力低下が進行していくために生活を続けていくことが困難となったりします。このような状況と共に、生活していくことをどのように捉えて、関わっていくことができるのでしょうか。今回のお話では、私たちがこれまで取り組んできたアセスメントと支援に関する研究をご紹介します。

慰霊祭・追悼式からみる現代社会

講演者 福田 雄 / 共生学系 コミュニティ学講座



<要旨>

激化する災害と私たちはどのように向き合うことができるのでしょうか。防災や減災の取り組みが重要であることは言うまでもありませんが、なかには防ぎ切ることができないものもあります。起きてしまった災禍と向き合う方法の一つが、慰霊祭や追悼式です。災禍が生じた記念日をめぐり執り行われる記念式典は、ある社会のなかで何が記念すべき出来事なのか、そして「われわれ」としていかに災禍に対処するのかを明らかにします。今世紀に進められるようになった記念式典の研究を概観しつつ、様々な社会や文化のなかで災禍はどのように語られ、意味づけられているのかをみていきたいと思います。具体的には、スマトラ島沖地震（2004年）や東日本大震災（2011年）といった津波災害の記念式典の事例をみることで、災禍と向き合う際にあらわれる現代社会の特質を考えてみたいと思います。

ナリワイをつくる：地球温暖化と環境危機に対する新しい政治

講演者 鈴木 和歌奈 / 社会学・人間学系 基礎人間科学講座



<要旨>

温暖化と環境危機が深刻化する今、大規模な社会・経済システムの変革が求められています。私たちは、生活者として何もできず、国や国際的な政策や規制、もしくはテクノロジーに頼るしか方法はないのでしょうか？私の研究では、自ら暮らし方を変えて、環境危機に対応しようとする人々に注目しています。例えば、空き家を自ら直して住み、自給自足の農業を行うと同時に陶芸作品を売って現金を得る。デザイナーとして働く傍ら古いビルを自ら改装して、Airbnb を始めるなどの生活です。このような複数の仕事を作り出して暮らす人々の生き方は、「ナリワイ」と呼ばれます。ナリワイは、文筆家でありナリワイ実践者の伊藤洋志氏によって生み出された概念です。本セミナーでは、ナリワイをつくるのがどのように社会や経済の仕組みを変えるポテンシャルを持つのかをお話したいと思います。

基礎と応用を循環する

講演者 木村 司 / 行動学系 人間行動学講座



<要旨>

本講演では講演者が行ってきた基礎研究と応用研究、そしてそれらの繋がりを概説します。私たちは街を歩いている時、ぶつかることなくスムーズに人とすれ違うことができます。これには「予測」と呼ばれるところの働きが関係していますが、「予測」は普段意識されず、また意識した段階でその働きが中断してしまう可能性があります。このようなところの働きを調べるために、講演者が開発した実験パラダイムと研究内容、そして近年取り組んでいる研究について紹介します。また、このようなところの働きを調べる方法や日常場面での心理状態の評価は、様々な分野、業界でも注目されています。しかし、これらを検討する際、どのような実験手法や指標が有用であるかは状況ごとに異なります。このような問題に対し、「主観」「行動」「生理」と呼ばれる複数の指標を組み合わせ検討した共同研究の事例を紹介します。

グローバル支援と地域のせめぎあいー2015 年ネパール大地震を事例

講演者 伊東 さなえ / 共生学系 グローバル学講座



<要旨>

世界各地で大規模な自然災害が発生する現代、被災地には国際機関や NGO など多様な支援が流入します。復興過程でも、家屋や文化遺産の再建、防災体制の整備といった分野で「国際的な標準」に基づく協力が行われます。しかし、被災地ごとに歴史や社会構造は異なり、国際的な枠組みと地域の文脈との間には摩擦や調整が生じます。では、グローバルな支援と地域社会は実際にどのように交渉し、対立し、ときに共存しているのでしょうか。報告者は 2011 年からネパールで調査をしてきました。2015 年の地震で主な調査地が被災してからは、日本の NGO や調査地の地域団体の活動に参加させてもらいつつ、復興過程を追ってきました。その参与観察に基づきつつ、グローバルとローカルの交錯と衝突を検討したいと思います。それを通じ、グローバル支援とローカルの関係性のあり方についても考える機会になれば、と思います。

「比較認知科学から見るベビースキーマ」

講演者 川口 ゆり／ノッティンガムトレント大学

2025年10月16日（木）13:30～15:00に、人間科学研究科ラーニングコモンズにて、川口ゆり先生による人間科学セミナー「認知科学からみるベビースキーマ」を開催しました。会場には18名、リモートでは14名の参加がありました。1時間のご講演のあと、多方面からの質疑が行われました。少人数でしたが、たいへん実りのある機会となりました。

ベビースキーマ（ドイツ語 Kindchenschema、英語 baby schema）は、オーストリア出身の動物行動学者 Konrad Lorenz が1943年に提唱した概念です。広く突き出た額、丸い顔、顔の下半分にある大きな目といった視覚的特徴を持つ顔に対して、人間はかわいらしいと感じ養護行動をとる仕組みが生まれつき備わっているという仮説です。直感的に納得できるため、長い間信じられてきましたが、それが本当に生得的な仕組みなのか、種を超えた進化的裏づけがあるかなどについては、詳細な検討が行われていませんでした。

今回の川口先生の講演では、さまざまなサルを対象とした実験を通じて、ベビースキーマとして指摘されてきた刺激の特徴（要素）は必ずしも普遍的ではなく、ヒト以外の種では認められないこともあることが紹介されました。「存在しない」ことを証明するのは難しいのですが、今後は、人類史の検討（たとえば中世以前のヨーロッパにおける子どもの扱いなど）も含めて、人間の幼児に対する反応や「かわいい」と思う気持ちについて、思い込みを超えて科学的に研究していくことの重要性が示されました。

イギリスからの一時帰国中に講演していただいた川口先生、実りのある質疑の時間にご協力いただいた参加者の方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



「人間科学における計量テキスト分析」

講演者 樋口 耕一 先生／立命館大学産業社会学部教授

2025年11月20日 9:00-12:00に、計量テキスト分析アプリケーションとして幅広く利用されている KH Coder について、開発者であり、『社会調査のための計量テキスト分析（第二版）』（2020年ナカニシヤ出版）、『動かして学ぶ！ はじめてのテキストマイニング』（2022年ナカニシヤ出版）などで知られている樋口耕一先生（立命館大学産業社会学部教授）にご講演いただきました。



樋口 耕一 先生による講演の様子

2時間にわたって、実際のデータ分析例、KH Coder の操作法、計量テキスト分析の有用性などについて、たいへん明解にお話いただきました。学部生、大学院生、教員など研究科内外から幅広い聴講者が集まり、講演後の質疑応答も活発に行われました。



大阪大学における社会調査法研究の40年：調査計量の発展と現状

講演者 吉川 徹／社会学・人間学系 教授

2026年2月5日（木）に、人間科学研究科 キャノピーホール（第51講義室）にて、26年人間科学研究科に在籍した吉川 徹教授が最後の授業として、阪大人科の経験社会学が歩んできた道のり、自身の研究と大学人としての事績、現代日本の社会学における調査計量のプレゼンスについて、90分にわたり講演されました。会場には、研究科の教員、学生のほか、遠隔からの参加者など多くの出席者が集まり、貴重な知識と情報が数多くちりばめられた講演を楽しみながら聞きました。

当日の動画は次のサイトにアップされています。

<https://www.youtube.com/watch?v=-UVgbdJk-tl>



吉川 徹 先生による講演の様子

◆1.2 学生企画によるプロジェクト

学生主導のイベントです。今年度は9件の「学生プロジェクト」を通じて、新しいつながりを生み出しました。

日付	タイトル	企画者
2025年 6月21日	記憶する、行動する、一緒にする ギボタネツアー報告会 & 『オレの心は負けてない』上映会	藤阪 希海、高柳 瞭太
2025年 7月18日	フィールドワーク座談会 ここでしか聞けない フィールドワークよもやまばなし	大野 裕貴、中野 立開 大原 理彩子、福井 悠斗
2025年 8月4日	生きもののからだ、私のからだ 動物模倣ダンスから共生を考える/感じる	中谷 碩岐、藤阪 希海
2025年 11月16日	大阪・茨木 隠れキリシタンの里を訪ねる キリシタン自然歩行トレイル	中谷 碩岐、石長 佑一
2025年 12月3日	絵本づくりワークショップ 「絵本表現と自己理解 ライフキャリア絵本講座」	谷口 あかり、中西 亜弥
2026年 1月19日	真面目に「笑い」を人間科学する	福井 悠斗、板野 史記 福本 航佑、郡 達ノ介 和田 陽喜
2026年 2月2日	ゆるシンポジウム 学校と質的研究のこれからを考える	薮本 佳奈、元田 安映
2026年 2月8日	ドキュメンタリー映画作家 ピエール・ペロー特集上映会	瀧口 隆、中谷 碩岐
2026年 2月12日	人間科学部 四学系横断 卒業研究等発表会	水門 裕策、河原 聡希

記憶する、行動する、一緒にする ギボタネツアー報告会 & 『オレの心は負けてない』上映会

実施日：2025年6月21日（土） 13:30～16:10

実施場所：豊中キャンパス 全学教育推進機構総合棟Ⅰセミナー室C

参加者数：12人

企画者：藤阪 希海・高柳 瞭太

○実施内容

大阪大学豊中キャンパスにおいて、「ギボタネツアー報告会」および、ドキュメンタリー映画『オレの心は負けてない』の上映会を開催した。本プロジェクトは日本に暮らす学生の視点から、日本軍「慰安婦」問題や、それをめぐる運動について考えることを目的として実施したものである。

本イベントは、「ギボタネ若者ツアー 2025 SPRING」（以下、ギボタネツアー）に参加した、関西在住の学生で企画・運営した。同ツアーは、性暴力のない社会を目指して「希望のたね基金」により実施され、韓国を訪問して日本軍「慰安婦」問題などについて学ぶプログラムである。

上映した映画『オレの心は負けてない』は、日本軍が「慰安婦」制度に関わっていたことを示す政府文書が見つかった1992年以後、元・日本軍「慰安婦」である宋神道（ソン・シンド）さんが、日本政府を相手にし



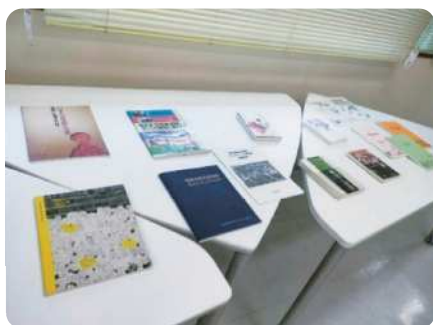
た裁判に挑んだ過程を記録したドキュメンタリーである。イベントでは、キボタネツアーを通じて得られた学びや葛藤を共有し、共に映画を視聴した後に、積極的な意見交換も行われた。

○プロジェクトの考察

本プロジェクトは、日本軍「慰安婦」問題をそれぞれの立場と結びつけて考え、歴史認識や人権課題に主体的に向き合う貴重な機会となった。

キボタネツアーの報告では、韓国での見聞を写真を交えて共有しつつ、報告者自身の属性や立場、また大学など身近な場所における問題と接続した議論が展開された。これにより、日本軍「慰安婦」問題に関する知識の提供に留まらず、その背景にある差別意識や人権に関わる課題、さらに日本社会における構造的な問題についても考えを深めることができた。

また本イベントは、日本軍「慰安婦」問題に関心のある人々がつながり、情報交換や交流をする場としても機能した。イベント前後には参加者同士で自己紹介をしたり、互いの関心を共有する場面も見られた。幅広い社会課題についての意見交換や、コミュニティや社会の変革に積極的に参与する意識が共有された。



会場内に展示した関連書籍

交流に際しては、会場内に展示した関連書籍も、参加者同士の会話のきっかけとして大きな役割を果たした。展示は、学びのリソースの紹介を目的としていたが、自然な形で交流を促進する働きもした。

運営面では、トラブルにより告知期間が極めて短くなったものの、当日は多様な背景の方にご参加いただき、「良いイベントだった」とのお声も寄せられた。今後も、日本軍「慰安婦」問題をはじめとする社会課題について考え、共に行動していこうという気持ちがいっそう強まる機会となった。

(文責：藤阪 希海)



会場の様子

フィールドワーク座談会

ここでしか聞けないフィールドワークよもやまばなし

実施日：2025年7月18日（金） 15:10～18:30

実施場所：人間科学研究科第41講義室

参加者数：14人（うち運営者4人）

企画者：大野 裕貴・中野 立開・大原 理彩子・福井 悠斗

○実施内容

【概要・目的】

2025年7月18日、人間科学研究科本館41講義室にて、「フィールドワーク座談会」を実施した。本プロジェクトでは、長期フィールドワークを経験した3名の学生が登壇し、研究論文や活動報告では語られない「裏話」を通して、フィールドワーカー特有の苦悩とそれを克服するフィールドワーカーの心得と態度を紹介する。パネルディスカッションや質疑応答を通して、参加者がフィールドワークのプロセスを具体的に理解し、各自のフィールド調査に適切に備えることを目的とした。



【当日の流れ】

プログラム

- オープニング・趣旨説明
- 自己紹介・フィールド紹介
- シャッフルトーク
- まとめトーク
- クロージング
- 意見共有



会場の様子

最初に座談会の実施目的や注意事項、フィールドワーク研究の状況を講義形式で伝え、参加者が実施背景を理解する時間を設けた。その後、登壇者の自己紹介・フィールド紹介をした。休憩時間を挟んだ後に、「シャッフルトーク」と題して事前に設定したテーマ（e.g. 日のスケジュール・フィールドに向かう前の準備、他）をランダムに選び、登壇者の経験や知見を共有した。適宜参加者からの質疑応答時間も設け、積極的な意見交換が行われた。最後には「まとめトーク」として、研究・キャリアにおけるフィールドワークの意義や今後フィールドワークに入る人へのメッセージを伝えた。またイベント終了後も、意見共有として登壇者・聴講者の垣根を超えてディスカッションを行なった。

○プロジェクトの考察

登壇者のフィールドワークに基づく経験談を共有する場として、会場は大きな盛り上がりを見せ、参加者・運営者双方にとって学びの多いプロジェクトとなった。参加者のなかにはフィールド調査を経験する学生もあり、登壇者の対話に対して共感や差異を実感する機会が生まれた。シャッフルトーク中にも、参加者から「フィールド調査に入る際の注意事項はあるか」など、質問をもらう時もあり、各人の経験知を共有する場になったといえる。またイベントの最後では、それぞれ研究関心の異なる参加者が調査手法について議論する時間も生まれた。イベント終了後、参加者からは「量的中心にしようかと思っていたが、フィールドワークという選択肢も考えるようになった」「様々な研究方法を実践する人同士で議論するのが楽しかった」「またしたい」「学部生にも聞いてほしい」といった言葉が出た。

フィールド調査というテーマを出発点として、「人間」を明らかにする多様な研究手法やその意義に関する意見が交わされ、学術的な対話を促進する機会になったといえる。そのため、本プロジェクトの目的は達成されたと共に、運営の想定よりも多くの学びが生まれる時間となったといえる。一方で、本プロジェクトの参加者のほとんどが大学院生で、学部生の参加者が少なかった。今後はイベント実施場所・時間・告知を工夫することによって、より多くの学生が参加できるようにしていきたい。

（文責：大野 裕貴）

生きもののからだ、私のからだ 動物模倣ダンスから共生を考える/感じる

実施日：2025年8月4日（月） 15:30～18:30
実施場所：人間科学研究科第106講義室
参加者数：総勢14人（講師1人、運営2人含む）
講師：堀川 よしとも
企画者：中谷 碩岐・藤阪 希海

○実施内容

2025年8月4日（月）、大阪大学吹田キャンパス人間科学部棟東館E106にて体験型ワークショップ「生きもののからだ、私のからだ：動物模倣ダンスから共生を考える/感じる」を開催した（講師：堀川 よしとも、運営：中谷 碩岐、藤阪 希海）。本イベントは、人間科学部・人間科学研究科を中心とした大阪大学関係者を参加対象とし、人間科学部棟で動物模倣の舞踊の体験会を実施することを通じて、各地の動物を模倣した舞踊について参加者の理解を深めるとともに、実際の体験を通じて相互交流を図ることを目的とするものであった。伝統的にコミュニティの形成において重要な役割を果たしてきた舞踊や音楽は従来「共生」のトリガーとして注目を集めてきた。とりわけ動物を模倣する舞踊は、参加者がイメージしやすいという点において「共生」のための媒介として範例的であるように思われる。今回のイベントでは、単に「共生」を理論的に理解するのみならず、実践を通じてこうした舞踊が持つ力を体験する機会を持つことを目指した。

今回のイベントでは、人間科学研究科のみならず、工学研究科など他の研究科の学生を含め、多くの来場者を迎えることができた。イベント当日は、中谷からの短い趣旨説明ののち、堀川氏主導でGalop Nantais（ウマの踊り）、La danse de l'ours（クマの踊り）、そしてKoccarap Zeybeği（トリの踊り）の三種類の動物を模倣する舞踊を体験した。報告者の印象としては、それぞれある程度フォーマルなもの、地元のお祭りのような盛り上がりを見せるもの、そして儀礼的側面が強いものであり、一口に「動物を模倣する舞踊」といっても、その内部にあるバリエーションやその背後にある各地の文化を感じた。またダンスの実践の中では、理学療法士でもある堀川氏から、舞踊における男役・女役の差異や、文化や慣習・社会構造がそれらに与える影響、人間と動物の骨格の同一性と差異などについて補足を受けつつ、実際に体を動かすことで、言葉では理解することが難しい部分も含めた動物模倣の舞踊の動きについて実践し、理解を深めた。



堀川氏と参加者による動物模倣ダンスの様子

○プロジェクトの考察

当初の目標通り、ワークショップでの実際の体験を通じて、動物を模倣する舞踊に関する参加者の理解は格段に深まったように思われる。堀川氏から口頭でご教示いただいた各舞踊の説明もそうだが、とりわけ実際に体を動かすことによって、骨の位置や筋肉の使い方など「踊り」を構成している技法を極めて具体的な位相で実感することができたことがおおきな収穫であった。また、初対面の参加者同士もカップルダンスなどを通じて（相手のことをほぼ知らない状態でも）会話が發生するなど、あらためて「舞踊」が持つ「共生」のトリガーとしての力を実感した。

他方で、今回のイベントでは「体験する」という側面を重視したこともあり、それぞれの舞踊の文化的背景について十分な考察を行う時間を十分に取ることができなかった。次回は、今回のイベントでは十分に論じられなかった文化的側面や踊りの発祥、実際の日常や非日常の中での具体的な役割などを含めて学ぶ機会を設けたいと考えている（しかし、こうした更なる関心を喚起することができたこともまた、このワークショップの最も大きな成果のひとつであり、この会なしにはあり得なかったことも言い添えておきたい。

（文責：中谷 碩岐）



大阪・茨木 隠れキリシタンの里を訪ねる キリシタン自然歩行トレイル

実施日：2025年11月16日（日） 9:15～15:00

実施場所：大阪府茨木市内

参加者数：8人

企画者：中谷 碩岐・石長 佑一

○実施内容



2025年11月16日に学生プロジェクト「大阪・茨木 隠れキリシタンの里を尋ねる」を開催した（講師：米田 翼 企画者：中谷 碩岐・石長 佑一）。本企画では、大阪府茨木市にあるキリシタン自然歩道を散策するとともに、大阪府茨木市にあるキリシタン遺物資料館の訪問のほか、隠れキリシタンの里と呼ばれる下音羽地区などを巡り、地元大阪・北摂の歴史について学ぶことを目的とした。今回のプロジェクトでは、引率教員として米田翼先生（人間科学研究科助教）をお招きした。米田先生はハイキングカルチャー（UL：ウルトラライト）に造詣が深く、ハイキング思想史に関する研究も行なわれている。参加者は、米田先生による北摂の自然歩道全体の解説とともに、実際にキリシタン自然歩道を歩くことで、かつての隠れキリシタンの生活に想いを巡らせた。

当日は晴天にも恵まれ、阪急茨木市駅に集合した後、キリシタン自然歩道周辺までバスで移動した。茨木市忍頂寺バス停から出発し、まずは「キリシタン墓碑」のある禅宗曹洞宗の高雲寺まで徒歩で向かった。狭い道路を歩きながら高雲寺に到着すると、紅葉が見事に色づいており、墓碑の痕跡も確認することができた。次に自然歩道を実際に歩き、キリシタン遺物資料館へ到着した。そこでは著名な「フランシスコ・ザビエル肖像」が発見された経緯など、映像資料も含め様々な資料が展示されており、改めて地域の歴史について学習することができた。その後、自然歩道を再び歩きつつ、北摂の隠れキリシタンの里を探索した。



当日の様子

○プロジェクトの考察

本プロジェクトは、大阪大学の基本理念「地域に生き、世界に伸びる」を再度真剣に受け取り、実社会と遊離した象牙の塔を脱して「地域に根差した大学」の構成員としての自覚を有することを目的して企画された。本企画において参加者は、キリシタン遺物資料館の展示を静的な仕方では学習するのみならず、北摂の自然の中を実際に自らの足で歩くことを通じて、隠れキリシタンと呼ばれる人々がどこでどのような生活を送っていたのかを、僅かなりとも再体験し、各々の仕方でもその生活についてより深く考えることができたと考えられる。参加者のひとりからは、「散策を通じて当時の隠れキリシタンたちが感じていただろう切迫感を身に持って体験できた」という声もいただいた。こうした感想は、自然の中を歩くという活動が、自然を体験するアクティビティという側面を有するだけでなく、実際に人々の生活した場所を再体験する、記憶の継承や伝承に関わる営為でもあることを示しているだろう。参加者と共にこうした機会を持つことができたという点において、本企画の目的は十分に達成することが出来たと考えている。

（文責：中谷 碩岐・石長 佑一）

絵本づくりワークショップ「絵本表現と自己理解 ライフキャリア絵本講座」

実施日：2025年12月3日（水） 13:00～15:00

実施場所：人間科学研究科本館第43講義室

参加者数：6人

講師：竹田 一義（一般社団法人 ライフキャリア絵本協会 代表理事）

企画者：谷口 あかり・中西 亜弥

○実施内容

【目的】

- ①自分のストーリーを絵本化することで自己理解・他者理解を深めること。
- ②自己肯定感を高める自己表現の手段としての絵本作りのプロセスを学び、対人支援の幅を広げるきっかけをつくること。

【実施方法】

一般社団法人ライフキャリア絵本協会の竹田先生にお越しいただき、2時間の絵本づくりワークショップを開催

【実施場所】

人間科学研究科本館 43 講義室

【参加者】

人間科学研究科：教務補佐員1名、教育工学講座2名、グローバル共生学講座1名、
特別聴講学生1名、臨床心理学講座1名

【ワークショップ詳細】



竹田先生と参加者のみなさん

はじめに参加者自身の人生を振り返り、ライフチャートを作成しグループ内で共有した。共有に際し、語りの背景を掘り下げ、価値観や強み、他者視点に気づく問いを意識して質問しあった。（例：「どんな気持ちでしたか?」「～な所が私にはない強みだなと感じました。」「それを周囲の人はどう思っていたんでしょうか?」）その後、自身の人生の中で印象に残っているストーリーをもとにオリジナルの絵本（全6ページ）を作成した。主に色鉛筆を使用し、表紙制作まで完成させた。完成後は製本のうえグループ内で読み聞かせ、感想を共有した。

○プロジェクトの考察

参加者の目的は、「絵本作りに興味がある」「自己理解のため」が多く、対人支援職（または目指す方）がほとんどであった。アンケート結果では、ワークショップの満足度が高く、全員が5点満点中4点以上の評価であった。参加者から「色々な人の人生経験を聞き、楽しい経験だった」「2時間で0ベースから作品が完成して嬉しかった」「集中できた」などさまざまな喜びの声をいただいた。

今回の目的である「自己理解・他者理解の増進」が達成できたように思う。誰もが自分の物語をもち、それを分かち合うことが相互理解につながることを改めて認識できた。また、色鉛筆で絵本を描く時間そのものが非日常的な空間となり、意図せず癒し効果を発揮した。日常生活とは離れ、「今、ここ」に意識を集中し、自分の思考や感情をありのままに受け入れる心の状態（＝マインドフルネス）を得ることに繋がった。



作成したオリジナル絵本

対人支援においては、ともすれば支援者-非支援者間で上下関係が生まれることが危惧されるが、絵本作りは同じ目線で個々の物語を分かち合う作業のため新たな支援方法としての可能性を秘めている。今後、さまざまな対人支援の展開に期待できる。
(文責：谷口 あかり)

真面目に「笑い」を人間科学する

実施日：2026年1月19日（月） 14:00～16:00

実施場所：人間科学研究科 インターナショナルカフェ

参加者数：20名ほど（登壇者含めて）

登壇者：板野 史記・福本 航佑・郡 達之介・和田 陽貴・（司会：福井 悠斗）

企画者：福井 悠斗・板野 史記・福本 航佑・郡 達之介・和田 陽喜

○実施内容



2026年1月19日に、人間科学研究科棟内インターナショナルカフェにて、「真面目に『笑い』を人間科学する」を実施しました。学生を中心として20名程が聴講にきていただきました。本イベントは3部構成で行いました。詳細は以下の通りです。

<第1部：自己紹介+発表>

内容：各登壇者が、自身の研究や活動を通じてカジュアルな形式で「笑い」に関する話題を提供。特に、板野氏による「名探偵津田の喜劇と悲劇」といったユニークなテーマや、郡・和田氏の活動紹介など、硬軟織り交ぜた発表が行われました。聴講者との双方向性を重視し、オーディエンスも口を挟める、活発な雰囲気で進行しました。

<第2部：トークセッション>

内容：高木漫才によるネタ披露と、その後のトークセッションを実施。バラエティ番組のような雰囲気を意図的に作り出し、学術的なテーマを一般の方にも親しみやすく伝えることを目指しました。

トークテーマ例：

- ・日々の生活でおかしさを感じたこと
- ・笑いはなぜ説明するとつまらないのか
- ・オーディエンスからの質問（QRコード等で随時募集）

<第3部：まとめ>

最後に、登壇者・参加者それぞれが、イベントを通じて得られた「笑いを人間科学するとは？」という問いに対する新たな視点や感想を共有し、イベントを締めくくりました。終始、学問の境界を超え、参加者全員が楽しみながら考察を深めることができたイベントとなりました。



イベントの様子

○プロジェクトの考察

イベントを通じて相互に異なるディシプリンにおける「笑い」の視座を検討することができた。また、院生の発表を通じて社会的、哲学的な視座を、オーディエンスに訴求しやすい具体的な日常のおかし

みやエンタメに落とし込む試みができたと考える。イベントを終えてテレビや芸人、対談での笑いのような切り口を発端に「アカデミックなワーディングを使わずにアカデミックな内容を議論する」ことを試みた斬新な機会をもたらしたと感じている。内容だけでなく、落語研究会メンバーによるMCや大喜利など「真面目な」トークセッションに一見似つかわしくないような斬新な演出を行うことができたことも意義深いものと考えている。

(文責：福井 悠斗)

ゆるシンポジウム 学校教育の質的研究のこれからを考える

実施日：2026年2月2日(月) 15:00~18:00

実施場所：大阪大学人間科学部棟東館第106講義室

参加者数：総勢14人(講師1人、運営2人含む)

講師：今井 聖(琉球大学)

企画者：薮本 佳奈・元田 安映

○実施内容

【開催目的】

- ① エスノメソドロジーを中心とした質的研究を学校で行うことの難しさを知り、参加者の今後の研究につながる場にする
- ② 学校で質的研究を行う学生同士で集まり、参加者の今後の研究につながる場にする

【詳細】

本シンポジウムでは、エスノメソドロジー(以下EM)をはじめとする質的研究に精通した今井 聖先生(琉球大学)を講師としてお迎えした。全体は3時間にわたり、二部構成で実施した。

第I部(Q&Aセッション)では、登壇者および参加者による自己紹介を行ったのち、企画者が代表して今井先生に質問を行った。

質問は、参加者から事前に募った質問や議論点を、今井先生のご著書『子どもの自殺問題の社会学』の内容に即して再構成したものを中心とした。今井先生には事前に、企画者からの質問と参加者からの質問リストを共有していたこともあり、当日はレジュメを持参くださった。これを資料として参加者に配布し、適宜参照しながら、著書執筆の経緯や過程を中心に、EMや質的研究についてお話いただいた。

第II部(トークセッション)では、特別モデレーターとして栗原 和樹先生(東京大学)、モデレーターとして知念先生(大阪大学・世話人教員)にもご登壇いただいた。知念先生の司会の下、教育研究に詳しい登壇者3名(今井先生、栗原先生、知念先生)を中心に議論が展開されると同時に、フロアからも質問やコメントを募る形で実施された。

議論では、EM的関心に基づく研究の社会貢献可能性や、歴史研究/実証主義的研究との関連、さらにより素朴な問いとして「学校をめぐる事象を理解する」とはどのような営みなのか、といった点が取り上げられた。また、参加者の多くが大学院生であったことから、博士論文を書籍化するときのエピソードや、質的調査の結果を分析したり文章にしたりしていく際の考え方などについても紹介された。フロアからの積極的な発言も多く、結果として予定していた1時間半をちょうどよく使い切り、会は盛会のうちに終了した。

さらに、会の途中の休憩時間や終了後には、参加者同士で話したり、名刺交換をしたりする様子が、会場内の各所で見られた。



○プロジェクトの考察

第Ⅰ部の質疑応答では、EMが理論的枠組みを先行させるのではなく、調査協力者との相互行為や対話の過程そのものに徹底して向き合おうとする研究姿勢であることを、再認識させられた。とくに、研究当初に盛んであった構築主義への違和感から、反理論的立場をとるEMへと舵をきっていった今井先生の研究経緯は、方法論の選択が研究者自身の関心や問題意識と深く結びついていることを感じさせるエピソードであった。また、自分とは異なる見解をもつ調査協力者（著書では遺族の方々）との「対話をあきらめない」姿勢が、社会的意義をもつ研究であるかの試金石になるという言葉も印象的であった。ほかにも、著書での限界や、質的調査データを一般化するほかの方法論との関係性も含めた議論が展開され、第Ⅱ部へのスムーズな導入へとつながった。

第Ⅱ部の議論では、実証主義的な立場に回収されることなく、研究をいかに「現場に返す」ことができるのか、という知念先生の問いかけを起点に展開された。これに対して栗原先生と今井先生は、EMは規範的主張とは結びつきにくいと、直ちに「役に立つ」ことにつながりにくい一方で、現場理解を深めたり現場に入る前に参照可能な「チュートリアル」を提供したりできる点で有効だとお話なさった。その後、EMにまつわる困難として、記述の選択をめぐる恣意性や、ブルデューなど既存理論との整合性の問題、さらに国際比較や歴史的記述への応用困難性などが挙げられ議論された。最終的には、専門知識なしでも読めるEM研究は、人々のコミュニケーションを開く社会的意義をもちうることや、研究者が日々の生活における会話理解を反省的かつ円滑に行ううえでも重要であることが確認され、参加者の関心を惹いた。第Ⅱ部全体を通してフロアからの質問が断続的に寄せられ、第Ⅰ部では拾いきれなかった参加者の疑問や関心を解消・深化させる場になっていたと振り返られる。

なお、参加者に事後アンケートを行ったところ、第Ⅰ部については、Q&Aセッションを通して、『子どもの自殺問題の社会学』に関する参加者の疑問が概ね解消されたことを伺えた。とくに、書籍では書かれきれなかった執筆の経緯や困難を直接聞けたことが、参加者にとって魅力的だったようだ。また、第Ⅱ部についても、「大変勉強になった」との感想が複数寄せられており、参加者にとって有意義な時間となったことが示唆される。

総合して本プロジェクトは、質的研究方法や内容の理解を促進するとともに、参加者同士の対話を喚起するという当初の目的を十分に達成したとまとめられよう。



トークセッションの様子

（文責：薮本 佳奈・元田 安映）

センター主催等のイベント

企画者：瀧口 隆・中谷 碩岐



あった。また「人々がカメラを気にせず好き勝手にケベックの人々が話す様に、映画に映る人々と映画作家との信頼関係が見えた」、という映画を撮るにあたっての作家と被写体の関係性をめぐる感想があった。さらに様々なテーマが錯綜する内容に「自分が活動のフィールドとしている NPO のことを思い出した」という参加者自身の経験と引きつける感想もあった。このように本作は、1960 年代かつクール島という遠い場所の現実を映しだしたものではあるが、現在の日本という場において鑑賞しても十分その映画の意義が見出せるということが感想からうかがえた。

また Planet+1 の代表の方からは、このような上映会を行うことで普段来ない学生などが観客として訪れてくれたと、学生プロジェクトとして映画館を借りて上映会を行うことに肯定的な意見をいただいた。このような上映会がただ知見を深める機会となるだけでなく、学生を中心に新たに映画館を訪れるきっかけとなるということを改めて認識できた。

(文責：瀧口 隆)

人間科学部 四学系横断卒業研究等発表会

実施日：2026 年 2 月 12 日（木）13:00～16:30

実施場所：インターナショナルカフェ

参加者数：19 名（発表者 5 名、聴講者 14 名）

企画者：水門 裕策・河原 聡希

○実施内容

2026 年 2 月 12 日（木）人間科学部インターナショナルカフェにて、四学系横断卒業研究等発表会を開催した。卒業論文を提出した人間科学部 4 年生 5 名を発表者・人間科学部の学部生・大学院生・教職員が聴講者として参加するポスター発表、交流会を実施した。各学系から参加者が集まり、学系を越えた議論、交流が行われた。

聴講者は 2 年生の割合が高かったため、聴講や質問のコツを伝えるとともに、研究そのものに対する質問だけでなく、発表者の関心のあることなど幅広い質問を受け付けるようにし、多くの参加者が積極的に議論に参加できるよう配慮した。また、ポスター発表では、多くの発表者がポスター発表未経験であったため、ポスターのテンプレートや作成のコツなどを共有し、参加のハードルを下げる工夫を加えた。当日は参加者が 5 名の発表全てを聴講できるようローテーションで聴講するという設定で実施した。1 名あたり 10 分の発表時間に加え、20 分の質疑応答時間を設け、参加者それぞれの関心から出る質問により多様な議論が行われた。また、休憩時間や交流会では学系だけでなく学年を越えた交流も行われた。



ポスター発表の様子

○プロジェクトの考察

本企画は、2024年度の「四学系横断卒業研究発表会」の2回目として開催したものである。4年生の発表者は大学院進学を予定しており、学会発表を見据えた練習や、他分野の人に自身の研究を伝えるという新たな経験を得たことと思われる。発表者からは「発表をしたり聞いたりする中で、自分の研究に対する新たな視点を得ることができた」というコメントがあり、発表者が自らの研究テーマを多角的に見つめるきっかけになったのではないかと考えられる。また、今回は2年生の参加者も多く、卒業研究や他分野への研究への高い関心が伺えた。2年生の参加者からは、「自分の学系でも他の研究室がどのようなことをやっているのかわからなかったため、自分の卒論展望の参考になった」というコメントがあった。様々な分野の研究を一度に聞けるという本企画ならではの効果があったと思われる。全体として活発な議論がなされ、また参加者それぞれの多様な関心から質問がなされており、参加者全員にとって意義深いプロジェクトであったと考える。



発表者の集合写真（一名は別途退出）

（文責：水門 裕策）

◆1.3 その他のイベント等

人間科学セミナーや学生プロジェクトのほか、以下の活動を行いました。

日付	タイトル	講演者	場所
2025 年 5 月, 7 月, 10 月, 11 月, 12 月, 1 月, 2 月, 3 月	手話カフェ	村田 雄樹 (Sign Art)	インターナショナル カフェ (吹田キャン パス)、D3センター 4階 マルチリンガル プラザ (豊中キャン パス)、他
2025 年 5 月15日	第 5 回 人科・情報研究交流会	辻 大介 (現代社会と社会理論研究分野) 佐々木 勇和 (ビッグデータ工学講座) 三浦 麻子 (社会心理学研究分野) Yihong Zhang (マルチメディアデータ工学講座)	ユメヌホール
2025 年 5 月17日	がいなんよ大学第 21 弾 「地域消滅を防いでいるのはだれか？ ～地方県の不可欠人材の人生を知る～」	吉川 徹 (人間科学研究科)	本家緒方蔵 (愛媛県 西予市野村町)
2025 年 5 月19日 ～20日	Philosophy of Technology and Imagination	Dario Vuger (University of Osijek) Camille Hervé (The University of Montpellier) Krešimir Purgar (University of Osijek) Takano Yasuo (Osaka Metropolitan University) Kyakumoto Atsunari・Oda Kazuaki・ Ishinaga Yuichi・Cao Simin (The University of Osaka)	人間科学研究科 + オンライン (19 日： 第 106 講義室 20 日： 第 303 講義室)
2025 年 5 月20日	Nicolas Prignot 先生特別講演会 'The machinic ontogenesis : reflexions on the productivity and pragmatism of machines in Felix Guattari's Chaosmosis'	Nicolas Prignot (ベルギー・サン＝リュック芸術 高等学院、ブリュッセル自由大学)	第 303 講義室
2025 年 5 月21日	フランスにおけるマグレブ系「移民」 映画『シャアバの子供』上映会、ならびに作家・ 社会学者アズーズ・ベガークとの対談	【ディスカッサント】 浪岡 新太郎 (明治学院大学) 【司会・企画】 園山 大祐 (大阪大学) 【逐次通訳】 下境 真由美 (オルレアン大学)	キャノピー ホール
2025 年 7 月28日 ～30日	「記憶の継承ラボ」写真展 「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」	吉成 哲平 (人間科学研究科)	インターナショ ナルカフェ
2025 年 7 月31日 9 月 1 日 10 月 8 日 12 月 4 日 2026 年 1 月 8 日	新企画！2025 年度 NVNAD ゼミ 『震災 31 年 誰もが助かる社会を構想する』	ハッ塚 としえ (「ぼうさい探検隊」提唱者) 大門 大朗 (福知山公立大学) 関 嘉寛 (関西学院大学) 谷一 浩平、宮川 智明 (高知県黒潮町役場) 山口 洋典 (立命館大学) 貫牛 利一 (チーム北リアス現地事務所) 小野寺 修一 (岩手県野田村役場) 長谷川 元気 (語り部 KOBE1995) 矢守 克也、語り部 KOBE1995 の 皆様、寺本 弘伸 (NVNAD) 渥美 公秀 (大阪大学)	西宮市民会館 501 会議室

日付	タイトル	講演者	場所
2025 年 8 月 3 日	『九鬼周造の人間学：破綻と再建』合評会	檜垣 立哉（専修大学） 織田 和明（大阪大学） 佐藤 虎（専修大学） 高橋 悠（東京女子大学） 八杖 春樹（立正大学）	中之島センター セミナー室 6 E + オンライン
2025 年 8 月 22 日	第 23 回 生物と行動セミナー 「Transformer の注意はヒトの注意に似ているか？」	山本 拓都（医学系研究科）	インターナショナルカフェ
2025 年 8 月 28 日	第 21 回比較行動学研究セミナー： イヌの「性格」に関する研究の展開	今野 晃嗣（麻布大学）	ラーニングcommons + オンライン
2025 年 9 月 11 日	共生の人間学セミナー 生活の思想研究会 「花森安治の暮らしの思想と商品テスト」	西川 晃弘（大阪大学）	産学共創 C 棟 4 階セミナー室 1 + オンライン
2025 年 10 月 11 日	緒方洪庵なタベ2025		適塾、他
2025 年 10 月 15 日	第 17 回共生学コロキウム 「分断と対立を超えて ー激動する国際社会と人間・環境・未来ー」	堀江 正彦 （元外務省参与・地球環境問題担当大使） 鈴木 雅和 （筑波大学名誉教授）	キャノピー ホール
2025 年 10 月 25 日	吹田市地域防災総合訓練		千里北公園・ 自然体験交流 センター
2025 年 10 月 29 日	教員のためのランチタイム カフェ & レジサ ポ見学 ～人科の教育研究環境にまつわる教員 交流の場～		レジサポルーム
2025 年 11 月 2 日 ～3 日	「ライフスキルトレーニングラボ」スポーツ合宿		吹田市自然体験 交流センター わくわくの郷
2025 年 11 月 9 日	グローバルビレッジ津雲台 第 5 回 GV フェス		グローバル ビレッジ津雲台
2025 年 11 月 11 日	ネイチャ・フィーリング自然「感」察会	山崎 初江・石塚 由美子 （NPO 法人ヘレンケラー 自立支援センターすまいる）	インターナショナルカフェ & コミュニティー ガーデン
2025 年 11 月 13 日	シンポジウム 「ボランティア元年 30 年を考える」	石原 凌河（龍谷大学） 鈴木 隆太（一般社団法人おもやい） 松田 曜子（京都大学防災研究所） 頼政 良太（関西学院大学） 中村 早希・宮本 匠（大阪大学）	ユメヌホール + オンライン
2025 年 11 月 13 日 12 月 25 日 2026 年 1 月 8 日	ヒトに寄り添うペルソナ創成プロジェクト 「デジタルクローン作成ワークショップ」	伊藤 庸一郎・上野 太輔・ 平井 啓 （人間科学研究科）	テクノアライ アンス棟 B308
2026 年 1 月 25 日	非喫や痛みを「わかちあう」会		大阪市住吉区
2026 年 1 月 26 日	国際ミニシンポジウム 中国からの留学生の事例から考える 留学生支援の現状と課題	黄均鈞（華中科技大学） 安元 佐織・瀬井 陽子（大阪大学）	第 106 講義室 + オンライン

日付	タイトル	講演者	場所
2026 年 2 月 1 日	令和 7 年度 身体障害者相談員 障害者の防災研修会と交流会	大門 大朗（福知山公立大学） 田中 穂乃香（京都大学） 米田 沙由葵（大阪大学）	福知山市総合 福祉会館内
2026 年 2 月 4 日	MeW プロジェクト主催研究会 『置くだけでは終わらせない 一万博を契機に考える生理用品の選択肢一』	小塩 若菜・付 若琳・原 聡美 （大阪大学）	インターナシヨ ナルカフェ
2026 年 2 月 6 日	2025 年度 大阪大学大学院人間科学研究科 第 8 回オムニサイト協定シンポジウム		CiDER 棟（大阪 大学・日本財団 感染症センター） 101 大ホール
2026 年 2 月 8 日	ワークショップ「来たるべき民衆と映画」	廣瀬 純（龍谷大学） 東 志保・瀧口 隆・大城 奈都 （大阪大学）	大阪大学 中之島センター セミナー室 6E+F
2026 年 2 月 16 日	『創発と物理』 研究会	森田 紘平（神戸大学） 中塚 海渡・野口 遥佳・上岡 壮真 （大阪大学）	第 106 講義室
2026 年 2 月 27 日	寂しさをなくすこと ―中山間地域の活性化 を「さみしさ」から捉え直す	作野 広和（島根大学） 石原 真衣（北海道大学） 渥美 公秀・権藤 恭之・村上 靖彦 （大阪大学）	キャノピー ホール
2026 年 3 月 2 日	第 10 回 阪大環境共生セミナー 「大量消費の暮らしを再設計する」	小野 邦彦（株式会社坂ノ途中） 山口 純 （（一社）一人一人社、武蔵野美術大学）	京都経済センター 6-A 号室
2026 年 3 月 11 日	津波記念碑写真コンテスト受賞式		インドネシア 気象庁アチェバ サール支部
2026 年 3 月 18 日	3 研究分野 合同輪読会	西村 剛・勝野 史子・萩原 広道 （人間科学研究科）	ラーニング コモンズ
2026 年 3 月 20 日	『障害者の倫理』合評会	北島 加奈子（立命館大学） 田村 海斗（早稲田大学） 辰己 一輝（無所属） 池田 信虎（大阪大学）	オンライン
2026 年 3 月 20 日 ～21 日	芸術でたどる 一ろうの記憶と今	濱田 慎一郎（蒔絵師・漆画家） えかきびと ともぞう（柴田智実） （画家／クリエイター）	大阪大学 中之島センター 5 階「創る場」
2026 年 3 月 22 日	2025 年度ガダマー協会第 3 回大会	森 祐亮・近藤 和敬（大阪大学） 廳 茂（神戸大学）	ユメヌホール、 第 106 講義室
2026 年 3 月 22 日	第一回 西日本哲学若手コロキウム	研究発表者	豊中キャンパス 共通教育総合棟 I スチューデント・ コモンズ セミナー室 C・D
2026 年 3 月 24 日	国際交流セミナー 「Children's Curiosity within Social Contexts」	Gert Westermann （Lancaster University）	インターナシヨ ナルカフェ ＋ オンライン

「記憶の継承ラボ」写真展 「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」

実施日：2025年7月28日（月）～ 30日（水）

開催場所：インターナショナルカフェ

担当：吉成 哲平（教員）

○実施内容

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」と人間科学研究科環境行動学研究分野は、2025年7月28日（月）から30日（水）にかけて、大阪大学人間科学研究科本館1階・インターナショナルカフェにて写真展「「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」を開催しました。

アジア・太平洋戦争の終結から今年で80年という節目を迎えます。その一方で、戦争体験者の多くが逝去することで、その直接的証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」に差し掛かりつつある現在、戦争・戦後体験や記憶の継承が急がれています。こうした社会的背景のもとで、これまで「記憶の継承ラボ」では、長崎や沖縄、水俣、福島などの各地にて記憶の継承に日々尽力する現場の実践者の方々に学びながら、戦争・戦後体験の意味について受け止めてきました。とりわけ、戦中戦後の生活を絶えず切り拓こうとしてきた人びとの模索の歴史の上に今日の現実があるという、過去からの重層的な時間の連続性について私たちは現場での内省を徐々に深めてきました。そこで、本展ではこれまでフィールドにて撮影を続けてきた写真の展示とギャラリートークを通じて、各地域における戦争と「戦後」の現実と向き合い続けてきた生活者の思想的営為の記憶とその現在について考えていくことを目指しました。

連日の猛暑にも関わらず、写真展には遠方の関東を含む学内外から延べ50名の皆様にご来場頂きました（写真1）。会期中は、これまで撮影を続けてきた筆者から撮影写真についてのギャラリートーク（各回30分程度）も毎日実施することで、それぞれの写真に込めた思いについて詳しく解説をさせて頂くこともできました（写真2）。参加者の皆様が熱心に耳を傾けて下さったことを、大変有り難く受け止めています。

特に、私たちが現場で学んできたのは、戦争が終わり、社会が再び立ち直っていったとしても、様々な傷跡や語り得ない思いを長年にわたり抱え続けながら人びとが紡いできた暮らしの現実であり、それは東アジアの激動する歴史とも密接に結びつ



写真2
ギャラリートークの様子
(2025年7月ラボメンバー撮影)

いていることでした。参加者の皆様からは、私たちが普段日常を送る中で見過ごしてしまいがちな各地域の生活の歴史とその現在へのつながりについて考えさせられたという貴重なご感想を頂いたことに加えて、ご自身にとって身近な地域での戦争や「戦後」の経験について対話させて頂く機会にも恵まれました。展示を通して参加者の皆様から頂いた応援を力としつつ、「記憶の継承ラボ」の活動を更に深化させていきたいと改めて心しています。

最後になりますが、本展の開催に際してお力添えを頂いた皆様へ厚く御礼を申し上げます。

今後とも、「記憶の継承ラボ」を宜しくお願い致します。

（文責：吉成 哲平）



写真1 展示風景(2025年7月筆者撮影)

第 21 回比較行動学研究セミナー：イヌの「性格」に関する研究の展開

実施日：2025年8月28日（木） 13:30～15:00

開催場所：ラーニングcommons/オンライン

講演者：今野 晃嗣（麻布大学・獣医学部・動物応用科学科）

担当：山田 一憲（教員）

○実施内容

第 21 回比較行動学研究セミナーを、対面と Zoom を使用したオンラインでのハイブリッド形式で開催しました。今野先生からイヌの「性格」について講演していただきました。

イヌ（*Canis familiaris*）は最古の家畜として知られており、古くからヒトと一緒に暮らしてきました。ヒトに外向性や協調性といった性格があるように、イヌも多様な性格があります。イヌの性格を測るためには、質問紙尺度法（アンケート）や行動評定法（遊びや音での反応）、性格の遺伝率が用いられます。

補助犬や作業犬など、イヌは様々な分野で活躍しています。これらの使役犬になるための訓練では、どのような性格のイヌが合格しやすいのでしょうか、合格しやすい遺伝子型はあるのでしょうか。今野先生は麻薬探知の訓練犬を対象として研究を行っています。今野先生の研究から、訓練犬の行動と訓練士からの評定によって訓練集中性が高いと合格しやすいこと、合格したイヌの遺伝子データから OXTR 遺伝子型が訓練への応答性に影響していることが明らかにされました。

講演終了後には、イヌの性格が変化する可能性はあるのか、今後変わっていく可能性があるにもかかわらず、イヌのある地点での性格をはかる必要があるのか、といった質問があり、学生だけではなく、一般の方々と交えてセミナーの終了時間まで熱い議論を行うことが出来ました。

セミナーに参加いただいた皆さま、なにより集中講義と本セミナーを引き受けてくださった今野先生にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



今野先生の講演の様子



セミナーの様子

（文責：梶 優花・山田 一憲）

令和7年度 身体障害者相談員 障害者の防災研修会と交流会

実施日：2026年2月1日（日） 13:30～15:30

開催場所：京都府福知山市総合福祉会館

担当：米田 沙由葵（学生）

○実施内容

【参加者】

身体・知的・精神障害のある方々およびその家族、自主防災ネットワーク関係者、市職員など、約45名。

【防災研修会兼交流会の詳細】

はじめに、福知山公立大学の大門准教授より、『星の王子さま』の一節「本当にたいせつなことは、目に見えないんだよ。」を引用しながら、目に見えないからこそ皆で考える必要がある課題について講演が行われた。あわせて、能登半島地震の事例をもとに、障害当事者やその家族が避難時に直面する具体的な問題について紹介があった。

その後、参加者は6班に分かれ、「クロスロード」を実施した。クロスロードは、京都大学の矢守克也教授らが開発したカード型の防災教育教材であり、カードに示された事例について、YESかNOかで自身の判断を示し、その理由を参加者同士で共有・議論しながら進めていくものである。正解を導くことなく、さまざまな立場や状況を想像しながら考えることが重視されている。

ワークショップでは、聴覚障害のある方を想定した設問と、避難所スタッフにとって対応が難しい薬の管理に関する設問を取り上げた。いずれの班でも議論は活発に行われ、判断を難しくする要因や、それぞれの立場から見える課題について、丁寧な意見交換がなされた。

【防災研修会兼交流会の考察】

参加者の一人から発せられた「めげない！くじけない！あきらめない！」という言葉は、災害時に限らず、日常的に困難と向き合いながら生活している当事者の姿勢を象徴するものとして印象的であった。

判断の難しさを共有し合う過程そのものが、参加者にとって学びとなり、互いの立場を想像する契機となった点は、本防災研修会兼交流会の大きな成果であるといえる。（文責：米田 沙由葵）

The poster is titled "令和7年度 身体障害者相談員 障害者の防災研修会と交流会" (2025 Fukuoka Prefecture Disaster Prevention Training and Exchange Meeting for Persons with Disabilities). It features a pink and white color scheme. A blue circle on the right says "参加費 無料" (Participation fee: Free). The text includes: "防災も交流も、顔が見える関係から！" (Disaster prevention and exchange, from relationships where you can see faces!), "今回は自主防災ネットワークの方々との研修、交流いたします！" (This time, we will have training and exchange with the autonomous disaster prevention network members!), "ゲームやワークを通して地域との繋がりを共に学びましょう！" (Let's learn together about the connection with the community through games and work!). The event details are: Date: 令和8年2月1日(日) 13:30~15:30; Location: 福知山市総合福祉会館内2F22、23号室 (Fukuoka City Comprehensive Welfare Hall 2F 22, 23 rooms); TEL: 0773-25-3211. The agenda includes: ① "能登半島の事例や障害を持つ方々の話" (Stories of the Noto Peninsula and people with disabilities) with a speaker from Fukuoka University; ② "大門先生によるワークショップ「クロスロードゲーム」" (Workshop by Mr. Daimon "Crossroad Game") with a facilitator from Fukuoka University; ③ "意見交換" (Exchange of opinions). The organizer is the Fukuoka City Disaster Prevention Committee, with contact info: 連絡先: FAX(0773)33-3502 (代表 横田), Eメール: chokora-sato.380@docomo.ne.jp. Logos for Fukuoka University, the Japanese Red Cross, and OPEN-LAB are at the bottom.

2025 年度 手話カフェ

実 施 日：2025 年 5 月～2026 年 3 月

開催場所：吹田キャンパス・豊中キャンパス（大阪大学）、
生野長屋大学ぼんぼこキャンパス（大阪市生野区）

講 師：村田 雄樹（Sign Art）

担 当：中井 好男（教員）

○実施内容

今年度は 5 月～7 月および 10 月～3 月の計 9 ヶ月間にわたり、月 2 回、豊中キャンパス（D3 センター）および吹田キャンパス（人間科学研究科インターナショナルカフェ）において実施しました。参加者は回によって変動はあるものの、概ね 5～15 名程度でした。特に豊中キャンパスでは、地域の手話学習者や手話サークル所属者の参加が見られ、学内外を問わず手話を通じた人々のつながりを生み出す機会となりました。

また、2 月にはオンラインおよび学外にある生野長屋大学ぼんぼこキャンパス（大阪市生野区）において開催し、手話に触れる機会の創出に加え、地域における交流の拡張を試みました。その結果、新たな参加者層との接続が生まれるとともに、一部の参加者が関連企画「芸術でたどるろうの記憶と今」（3 月 20 日・21 日、大阪大学中之島キャンパス）へ参加するなど、活動間の連関も確認されました。

対話を通してディスアビリティを捉え直すという本プロジェクトの理念が具現化された一つの成果であると考えています。



手話カフェ開催の様子

2 大阪大学オムニサイト協定（OOS協定）

大阪大学オムニサイト（OOS）は、2017年4月新たな共創の仕組みとして始動しました。産官社学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援、活用します。OOSが創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。OOS協定を活用し、これまでに様々なプロジェクトが実施されました。

◆2.1 大阪大学オムニサイト（OOS）協定先一覧（2025年度）

一般社団法人全国自治会活動支援ネット	一般社団法人全国寺社観光協会
一般社団法人今井町大和観光局	岩手県九戸郡野田村
パナソニックホームズ株式会社（旧パナホーム）	新安世紀教育安全科技研究院
NPO 法人北いわて未来ラボ	NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク
NTN 株式会社	ダイハツ工業株式会社
一般社団法人タウンスペース WAKWAK	大阪市教育委員会
共和メディカル株式会社	中銀インテグレーション株式会社
西予市野村地域自治振興協議会	愛媛大学社会共創学部
一般社団法人地域情報共創センター	大阪トヨタ North 株式会社
吹田市社会福祉協議会	一般社団法人パースペクティブ
タマパック株式会社	株式会社日本電商
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	被災地 NGO 協働センター
一般社団法人おもやい	インドネシア気象・気候学・地球物理庁（BMKG）

2025年度新たな協定

① 被災地 NGO 協働センター ② 一般社団法人おもやい

大阪大学人間科学研究科は、一般社団法人おもやい、被災地 NGO 協働センターと「大阪大学オムニサイト（OOS）」協定の調印式を行いました。

2025年11月13日、人間科学研究科本館において、一般社団法人おもやい、被災地 NGO 協働センター両代表者、大阪大学人間科学研究科の関係者が参集し、大阪大学オムニサイト協定（以下「OOS協定」と称します）の調印式が執り行われました。

〈両団体について〉

一般社団法人おもやいは、令和元年8月の佐賀豪雨災害を契機に、武雄市民と民間ボランティア団体が協力して結成された団体で、令和2年3月19日に正式に設立されました。これまで、武雄市を再び襲った水害や、2024年能登半島地震など多くの被災地で継続的な支援活動を行っています。

被災地 NGO 協働センターは、阪神・淡路大震



協定書署名後の記念撮影

災害発生後の1995年1月19日に結成された地元NGO 救援連絡会議の分科会が元になり、1998年4月1日より組織を現名称に改称しました。以降、国内外で多くの被災地支援を行い、長年にわたり被災者の孤立を防ぐ取り組みを続けている団体です。

〈調印式の概要〉

調印式では人間科学研究科長（兼附属未来共創センター長）の西森教授が開会の挨拶を行い、OOS協定が社会学共創をさらに促進し、協定先同士が連携を強化していくことへの期待が述べられました。

続いて、両団体の代表者および人間科学研究科の担当教員が、それぞれ協定締結までの経緯や今後の展望、期待される効果について意見を述べられました。

今回締結されたOOS協定を通じて、災害支援におけるより持続的な社会学共創の実現に向けて、取り組みが推進されることが期待されています。

2025年度新たな協定

③ インドネシア気象・気候学・地球物理庁（BMKG）

2025年12月10日、人間科学研究科本館において、インドネシア気象・気候学・地球物理庁（BMKG）代表者、大阪大学人間科学研究科の関係者が参集し、大阪大学オムニサイト協定（以下「OOS協定」と称します）の調印式が執り行われました。

〈インドネシア気象・気候学・地球物理庁（BMKG）について〉

インドネシア気象・気候学・地球物理庁（BMKG）は、インドネシア政府の機関であり、気象や地球観測、そのデータ管理、これらに関する人材育成や教育に携わっています。

同庁は1866年気象と地球観測活動を開始し、現在では気象・地球物理学を担う政府機関として活動を続けています。本年8月インドネシア気象・気候学・物理庁長官が阪大総長を表敬訪問しました（<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/international/news/visits/ewdk0z/c2c2jx>）。

〈調印式の概要〉

調印式ではまず、人間科学研究科長（兼附属未来共創センター長）の西森年寿教授が開会の挨拶を行い、OOS協定による社会学共創のさらなる促進や、協定先同士の連携強化への期待が述べられました。

続いて、BMKGからNelly Florida Riama局長がオンラインで、同津波担当課長Suci Dewi Anugrah氏と人間科学研究科の担当杉本めぐみ准教授が、本協定締結に至る経緯や、今後の展望、期待される効果について意見を述べられました。

今回締結されたOOS協定を通じて、インドネシアと日本の津波減災支援において、より持続的な社会学共創の実現に向けた取り組みが推進されることが期待されています。



協定書署名後の記念撮影

◆2.2 OOS 関連イベント

日付	タイトル	主催等	開催場所
2025 年 4 月 13 日	豊川桜まつり	中島地区コミュニティセ ンター豊川分館、 日本災害救援ボランティ アネットワーク	石川県七尾市
2025 年 4 月 13 日 ～ 10 月 13 日	大阪・関西万博でのトイレ内生理用品無償提供事業	株式会社日本電商、 MeW プロジェクト	夢洲 大阪・関西万博 会場
2025 年 4 月 28 日、 29 日	2025 防災減災大会	中国災害防御協会	中国浙江省杭州市
2025 年 5 月 17 日	がいはんよ大学 in のむら 第 21 講 「地域消滅を防いでいるのはだれか？ ～地方県の不可欠人材の人生を知る～」	NEO のむら	愛媛県 西予市野村町 本家緒方蔵
2025 年 6 月 26 日 ～ 7 月 20 日	自分たちで観測する、都市のエコロジー展 Urban Flows Exhibition (https://peatix.com/event/4460357)	都市エコロジー観測所	京都市左京区 Bridge Studio
2025 年 7 月 19 日	がいはんよ大学 in のむら 第 22 講 「NEO のむらお土産作戦室」	NEO のむら	愛媛県 西予市野村町 本家緒方蔵
2025 年 7 月 23 日	SAFE TOWN DRIVE OSAKA キックオフミーティング	あいおいニッセイ 同和 損害保険株式会社	あいおいニッセイ 同和損保 フェニックスタワー
2025 年 7 月 31 日	第 1 回 NVNAD ゼミ 「防災といわない防災」	日本災害救援ボランティ アネットワーク	兵庫県 西宮市民会館
2025 年 8 月 4 日	インドネシア気象庁長官一行の阪大総長訪問	大阪大学	大阪大学本部
2025 年 8 月 5 日	大阪関西万博「気候変動による女性への影響」 シンポジウムにてインドネシア気象庁 (BMKG) 長官基調講演	大阪大学・IEEE	夢洲 大阪・関西万博 オランダパビリオン
2025 年 8 月 16 日 ～24 日	コミュニティ・ラーニング	野田村	岩手県野田村
2025 年 9 月 1 日	第 2 回 NVNAD ゼミ 「災害救援の現場で実際に起こっていること」	日本災害救援ボランティ アネットワーク	兵庫県 西宮市民会館
2025 年 9 月 13 日	がいはんよ大学 in のむら 第 23 講 「伊予生糸と福山デニムが織りなす 新たな価値」	NEO のむら	愛媛県 西予市野村町 本家緒方蔵
2025 年 10 月 8 日	第 3 回 NVNAD ゼミ 「安心して逃げることができる社会」	日本災害救援ボランティ アネットワーク	兵庫県 西宮市民会館
2025 年 10 月 11 日	緒方洪庵なタベ 2025 創作落語「医の種・緒方洪庵 2025」	「緒方洪庵なタベ 2025」 実行委員会	適塾、活ふぐ専門 料理とらふぐ屋
2025 年 10 月 25 日	がいはんよ大学 in のむら 第 24 講 「がいはんよ大学 大学祭」	NEO のむら	愛媛県 西予市野村町 本家緒方蔵

日付	タイトル	主催等	開催場所
2025 年 10 月 28 日 開会式 同年 11 月中 データ収集 同年 12 月 18 日 表彰式	エコ&セーフティドライブコンテスト	あいおいニッセイ同和 損害保険株式会社等、 茨木市、茨木警察署	茨木市文化・ 子育て複合施設 おにクル
2025 年 11 月 9 日	グローバルビレッジ津雲台 第 5 回 GV フェス	グローバルビレッジ津雲台 街づくり協議会	グローバルビレッジ 津雲台
2025 年 11 月 15 日	鹿児島県始良市避難所受付システム実証実験	始良市役所、 一般社団法人地域情報共 創センター、 人科稲場研究室	始良市加治木支所 多目的ホール
2025 年 11 月 16 日	鹿児島県鹿屋市避難所受付システム実証実験	鹿屋市川東町内会、 一般社団法人地域情報共 創センター、 人科稲場研究室	鹿屋市川東町内会 公民館
2025 年 12 月 4 日	第 4 回 NVNAD セミ「災害から復興した？」	日本災害救援ボランティ アネットワーク	兵庫県 西宮市民会館
2025 年 12 月 10 日	OOS 協定調印式	人間科学研究科・インド ネシア気象・気候学・地 球物理庁 (BMKG)	大阪大学人科本館
2025 年 12 月 15 日	野田学講義	野田村	岩手県野田村
2026 年 1 月 8 日	第 5 回 NVNAD セミ 「災害の体験を語り継ぐ“私たち”って？」	日本災害救援ボランティ アネットワーク	兵庫県 西宮市民会館
2026 年 1 月 17 日	被災地交流会	日本災害救援ボランティ アネットワーク	兵庫県西宮市
2026 年 2 月 3 日 ～5 日	OOS シンポジウム団体紹介の発表のため来日と大阪 湾岸と防災設備視察	未来共創センター・イン ドネシア気象庁・ TSUNAMI DRR Labo	大阪府内
2026 年 2 月 6 日	第 8 回オムニサイト協定シンポジウム	未来共創センター・ Project IMPACT・ 大阪大学ユネスコチェア	大阪大学 CiDER 棟 (大阪大学・日本財 団感染症センター)
2026 年 2 月 13 日	野田学講義	野田村	岩手県野田村
2026 年 2 月 14 日	2025 年 11 月サイクロン被災地視察・支援地選定	インドネシア気象庁・ TSUNAMI DRR Labo	インドネシア・ アチェ州
2026 年 2 月 15 日	OOS シンポジウム参加報告会	インドネシア気象庁・ TSUNAMI DRR Labo	インドネシア・ アチェ州 (オンライン併用)
2026 年 3 月 10 日 ～12 日	東日本大震災 15 年被災地交流会	野田村	岩手県野田村
2026 年 3 月 11 日	津波記念碑写真コンテスト受賞式	インドネシア気象庁・ TSUNAMI DRR Labo	インドネシア・ アチェ州
2026 年 3 月 24 日	がいなんよ大学 in のむら 第 25 講 「災害時における宗教施設の役割」	NEO のむら	愛媛県 西予市野村町 本家緒方蔵

活動報告：津波記念碑写真コンテスト受賞式開催報告

実施日：2026年3月11日（水）

開催場所：インドネシア気象庁アチェベサル支部

担当：杉本 めぐみ（教員）



写真1：Flyer

2025年度OOS協定を締結したインドネシア気象庁とIMAPCTオープンプロジェクトTSUNAMI DRRラボは、2月東日本大震災15周年に因んだ津波記念碑写真コンテストの応募を開始し36名の応募がありました（写真1：Flyer）。日本とインドネシアで同時に追悼するため、2026年3月11日上位3名へ受賞式をインドネシア気象庁アチェベサル支部にて開催しました。

受賞是一位Mudassir氏、二位Abrar Mus'ad Yussa氏、三位Bintang Haris Boenian氏です。一位Mudassir氏は、小学校SDN6の教員です（写真2）。写真（写真3）は、20年を過ぎ日ごろは忘れられる狭い空間に建っている2004年スマトラ津波の記念碑について、小学校の子どもたちが先生から教わっている現在の様子を映し撮られたものです。85基のうち77基に減った災害伝承碑が今後も2004年スマトラ津波と2011年東日本大震災を経験した両国の災害伝承が、次の世代へつながる希望が撮られています。



写真2



写真3

本写真コンテストは、シャクアラ大学と大阪大学の学部生が主体的に運営しました。インドネシアから2月6日OOSシンポジウムのために来日した気象庁若手職員の二人が、今回の写真コンテストのリーダーとなりました。日本とインドネシアの両国の津波を経験していない若者の力で、これから災害伝承をつないで行くことが期待されます。

活動報告：MeW プロジェクト（大阪・関西万博の会場内トイレへの MeW ディスペンサー設置）

MeW プロジェクトの OOS 協定先の株式会社日本電商様の多大なるご協力をいただき、大阪・関西万博の会場内トイレに MeW ディスペンサーの設置と日本電商様協賛による生理用品の無償提供が行われました。

詳細については、本報告書の「3.1 未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトの活動」における MeW プロジェクトの報告ページをご参照ください。



万博会場にて（日本電商ご関係者様と）

◆2. 3 OOS 協定シンポジウム

活動報告

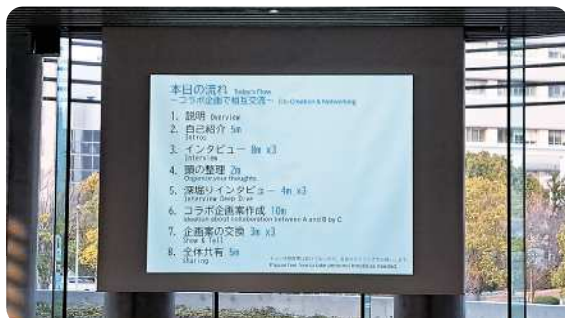
「第 8 回大阪大学オムニサイト協定シンポジウム」

実施日：2026 年 2 月 6 日（金）14:30～16:30

開催場所：大阪大学 CiDER 棟（大阪大学・日本財団感染症センター）1 階 101 大ホール

人間科学研究科附属未来共創センター「第 8 回大阪大学オムニサイト協定シンポジウム」は、2026 年 2 月 6 日（金）、吹田キャンパス CiDER 棟（大阪大学・日本財団感染症センター）1 階 101 大ホールで開催されました。オムニサイト協定 26 団体のうち 15 団体にご参加いただき、参加者は人間科学研究科関係者を含めて 62 名でした。

当日は、人間科学研究科プロジェクト IMPACT 小牧事務室長が司会進行を務め、冒頭で人間科学研究科長 西森 年寿より開会の挨拶がありました。続いて、新 OOS 協定先について、協定担当教員から紹介がありました。まず、佐賀豪雨災害を機に設立された一般社団法人おもやい、阪神・淡路大震災を機に設立された被災地 NGO 協働センターについて、協定担当の宮本 匠准教授から紹介があり、両団体が取り組んでいる被災地での支援活動および平時の助け合い活動について説明がありました。



OOS シンポジウムの流れ



協定先からのご挨拶

また、同じく新協定先であるインドネシア気象・気候学・地球物理庁（BMKG）について、協定担当の杉本 めぐみ准教授から紹介がありました。BMKG からは地球物理局長代理のジュマディン氏、BMKG のインターン生であるシャクアラ大学のチュット氏が来日し、BMKG の業務内容についてや、アチェ州における津波の高さを知らせる TSUNAMI POLE 設置 20 年後の防災啓もう活動の取り組みについてプレゼンテーションがありました。



協定先の紹介

後半は、「コラボ企画で相互交流」と題して、多様な分野の OOS 協定先から参加されている参加者の方々が、お互いを知り合うことを目的としたワークショップを実施しました。異なる協定先団体に所属する参加者が 3 名 1 組のグループをつくり、自分以外の他の 2 者に対して、インタビューを実施しました。普段は接することが少ない業種や、遠方の地方自治体、海外の様子などを興味を持って質問し合う様子が見られました。

それぞれの団体が向き合っている社会課題や、得意分野などをインタビューによって引き出し、配布された用紙に書き出しながら相互理解を深めた上で、二者の特徴を活かした「コラボ企画案」を考え、最後に代表グループが発表を行いました。日本語を母語としない参加者もありましたが、人間科学研究科の大学院生が通訳およびファシリテーターとしてグループに加わり、ディスカッションを活性化させることができました。

最後に西森研究科長より、参加者への感謝と、引き続き協力のお願いが述べられ、閉会しました。当日は国内外から多くの方々にご参加いただき、誠にありがとうございました。改めまして御礼申し上げます。



コラボ企画案作成の様子

3 未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト

「社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育研究活動の強化を図る」という未来共創センターの目的に沿い、2020年度人間科学研究科教員のボランティアな意思にもとづいてオープンプロジェクトを開始しました。教員が自発的に組織する社会学連携・社会学共創活動を支援しています。2023年度から未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトとして、大阪大学全体に公募を拡大しました。今年度は社会実装型（5年）4件と、スタートアップ型（3年）27件の計31のプロジェクトが採択されました。また、大阪大学ユネスコチェアとの連携も開始しました。

社会実装型プロジェクト（5年まで）			
1	復興まちづくりラボー野田村	2	生野区における多文化まちづくり活動における社会学共創プロジェクト
3	グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP）	4	大阪大学人間科学研究科 MeW プロジェクト
スタートアップ型プロジェクト（3年まで）			
1	Ethnography Lab	2	災害ボランティアラボ
3	心理・行動フォーサイトラボ	4	子どもの安全ラボ
5	老いと死の研究ラボ	6	緒方らぼ
7	哲学の実験オープンラボ	8	地域の食とプラネタリーヘルス
9	全国人間科学系部局の連携と活動継続化	10	縮退社会ラボ
11	災間社会ラボ	12	みんなのフィールドエソロジーラボ
13	記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）	14	プロジェクト SOUP (Share Our Unique Perspectives)
15	Tsunami DRR (Disaster Risk Reduction) Lab.	16	対話で進めるディスアビリティ・インクルージョン
17	多様性の中のウェルビーイング	18	ACE ラボ
19	多文化共生とオープン・ライブラリー・プロジェクト	20	発達と教育のためのプレイフル・ラボ
21	複合的災害とジェンダーに関する研究における日豪交流	22	ヒトに寄り添うペルソナ創成プロジェクト
23	ライフスキルトレーニングラボ	24	地域共生社会を目指す地域福祉プロジェクト
25	親と子の育ちのラボ	26	文学・演劇研究に基づくアート作品公開プロジェクト
27	食と人間科学の学び合いラボ		

◆3.1 未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトの活動

社会実装型プロジェクト（3年間の活動）

◎1 復興まちづくりラボー野田村 担当教員：渥美 公秀

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：3件／185人

東日本大震災の被災地である岩手県野田村に長期的に関わりながら、野田村の復興まちづくりに寄与する取り組みを行った。併せて、阪神・淡路大震災連続シンポジウム（2023年度）および被災地交流会（2024年度）を開催し、「被災地のリレー」を通じて復興まちづくりに貢献した。

(1) 野田学講演（2023年度-2025年度）

野田村で、年間2,3回の「野田学講演」を開催し、復興まちづくりに関する情報提供を行った。

(2) コミュニティラーニング（2023年度-2025年度）

毎年開催しているフィールドワーク実習の授業を補助した。具体的には、本プロジェクトとして、事前学習、事前現地調整、授業、事後現地調整を補助した。

(3) 阪神・淡路大震災連続シンポジウム（2023年度）

2023年度を通じて開催した連続シンポジウムにおいて、野田村の復興まちづくりの一環としての被災地のリレーに関する情報提供をしてもらい、阪神・淡路大震災で被災した住民と意見交換を行った。

(4) 被災地交流会（2024年度）

阪神・淡路大震災30年に際して開催した被災地交流会に被災地の1つとして野田村からの参加を求め、野田村の復興まちづくりの経緯を報告してもらうとともに、全国各地の復興まちづくりの報告を聞いて参考にもらった。

(5) 連続ゼミ（2025年度）

災害救援、復興、防災に関するゼミ形式の市民学習会に、野田村からの参加を求め、復興まちづくりの問題点を挙げてもらい参加者との議論を通して改善に向けた参考情報を得てもらった。



阪神・淡路大震災連続シンポジウム 第3回
「被災地のリレー ～恩送りのできる社会へ～」



阪神・淡路大震災30年被災地交流会の様子

連続ゼミ(2025年12月4日) 「災害から復興した？」

災害から復興した？
～東日本大震災からの歩みとこれから～

野田村役場からのプレゼン

野田塩への道【道の道】
（この道は、復興の道、希望の道、未来の道）

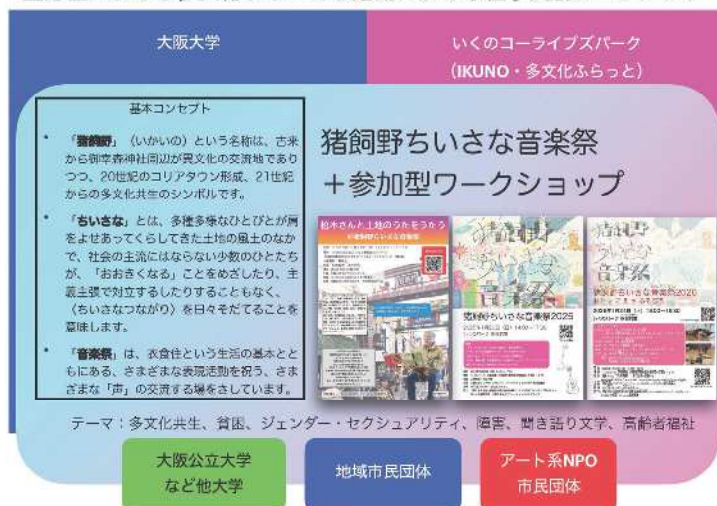
今後の復興へのアイデアとして提示

◎2 生野区における多文化まちづくり活動における社会学共創プロジェクト 担当教員：ほんま なほ

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：8件／328人

本プロジェクトは大阪市生野区を中心とする市内の複数地区における多文化共生、社会的孤立、少子高齢化、性の多様性への理解などのさまざまな課題に取り組むために、大阪大学と地域が協働するプラットフォーム「いくのふらっとだいがく」などを活用し、大阪大学の大学院生・修了生と地域住民の交流を促進するためのセミナー、参加型ワークショップ、COデザインセンター開講科目受講生による生野コリアタウンまちあるき、「猪飼野ちいさな音楽祭」を開催し、文化創造という点から生野と複数地域（熊本、沖縄、兵庫）、分野とテーマを横断する参加型文化イベントを実施した。生野区のみならず、上記の活動に参加した受講生が、同様の課題をかかえる西成区・釜ヶ崎の住民と交流を重ねながら、マイノリティの表現のもつ豊かさを発信するための参加型イベントの企画と実施（「カマボール」など）に参画し、年齢、職業、地域、性別、文化・民族、能力などの要因により分断されがちな属性や集団をまたいで、社会で協働するための文化実験をおこなった。

生野区における多文化まちづくり活動における社会学共創プロジェクト



◎3 グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP） 担当教員：稲場 圭信

▶ウェブサイト：<http://patona-suita-tsukumodai.jp/>

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：11件／2,780人

本プロジェクトは、「留学生を含むあらゆる学生、教職員が同じ場所で生活し、活発なコミュニケーションを可能とする国際的生活環境を実現することにより、地域との交流を通じた人と人との新たなインタラクションを生み出す」ことを理念として掲げ、2020年度から2022年度はオーブンプロジェクトとして、2023年度からはIMPACT・オーブンプロジェクトとして取り組みを継続してきた。GV内の阪大セクションと商業セクションの交流、さらには津雲台の地域住民との関係構築の機会を設け、キャッチフレーズ決めや、コンセプトブックの作成をはじめとするGVの雰囲気・文化の醸成、あらたなコミュニティづくりの社会実験およびアクションリサーチを実施してきた。また、GVフェスというGV全体でのお祭りイベントを毎年11月に開催し、コミュニティづくりに取り組んだ他、GVでコミュニケーションを高める実験的な技術の導入を試み、成功事例を他の地域に展開、応用した。

◆GVフェス 毎年11月に実施

◎第1回GVフェス・オープニングセレモニー、防災まち歩きを合わせて実施（開催日：2021年11月21日）

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/reports/211228a/>

◎第2回 GV フェス・防災まち歩きを合わせて実施（開催日：2022年11月20日）

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/reports/221207a/>

◎第3回 GV フェス・防災まち歩きを合わせて実施（開催日：2023年11月19日）

<https://riccc.or.jp/news/2023/11/2103/>

◎第4回 GV フェス・避難所受付システム実証実験を合わせて実施（開催日：2024年11月10日）

<https://riccc.or.jp/blog/2024/11/2685/>

◎第5回 GV フェス（開催日：2025年11月9日）

◆地域コミュニティ、自治体と共同で防災訓練・実証実験

◎咲州子ども EXPO 2024（実施日：2024年10月26日・27日） 参加者：地域住民等約140名

◎鹿児島県鹿屋市川東町（実施日：2024年11月17日） 参加者：町内会防災リーダー等約20名

◎鹿児島県鹿屋市高須町（実施日：2024年11月17日） 参加者：町内住民80世帯約100名



GV フェス



始良市避難所受付システム実証実験



近畿地方 DMAT ブロック訓練
(2024年11月8日・9日実施)

◎4 大阪大学人間科学研究科 MeW プロジェクト 担当教員：杉田 映理 <ユネスコチェア連携>

▶ウェブサイト：<https://mew.hus.osaka-u.ac.jp/>

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：5件／750人（万博でのシンポジウムを含む）

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：26件／2,240人

（3年間の主な活動内容）

2023年度は、MeW ディスペンサーの学内定着と社会実装に向け、学内の設置場所の可視化、モニタリング体制整備、利用者調査を実施した。産学連携として2社とOOS協定を締結し、製造・販売体制の検討と普及を推進するとともに、万博導入準備や能登半島地震避難所への寄付・設置（58台）など災害時運用も検証した。

2024年度は、万博での実装に向け、トイレ設置・展示・イベント等の企画調整と手続きを本格化させ、ディスペンサーの仕様改善（多言語対応、点字等）を進めるとともに「トイレ



万博のトイレに設置した MeW ディスペンサー

に生理用品を常設する」社会デザインの周知基盤を整備した。併せて、大手業者のオンライン販売開始に向けた資料整備、啓発活動や月経教育活動も展開した。

2025年度は、大阪・関西万博を実証の場として「トイレ内で生理用品を無償提供できる社会」の実現を掲げ、イベント4件（シンポジウム／動画配信／展示・WS等）を実施した。あわせて会場内9か所のトイレに MeW ディスペンサー 68台を6か月間設置し、OOS協定先に日本電商様の協賛を得て3種の生理用品を無償提供した。会期の前後に大規模オンライン調査で意識変化等を検証し、研究会やイベントを通じて成果発信を行い、加えてアウトリーチ課活動（展示・共創DAY等）で社会的波及を図った。



「夢つながり未来館（ゆいぴあ）」
の展示

◎1 Ethnography Lab 担当教員：森田 敦郎

▶ウェブサイト：<https://ethnography.hus.osaka-u.ac.jp/>

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：7 件／110 人

Ethnography Lab はトロント大学発祥の国際的なネットワークで、大阪大学では学内でのエスノグラフィ教育の推進、社会の多様なアクターとのエスノグラフィを通じたコラボレーションの推進を目指して設立された。

これまで人間科学研究科での大学院共通科目三科目の運営を行い、毎年 50 名を超える学生にエスノグラフィの基礎教育を提供してきた。また、大阪大学フォーサイト株式会社を通して企業人向けのエスノグラフィ教育プログラムを実施したほか、同社を通して複数の企業、自治体にエスノグラフィの調査に基づくコンサルティングを行った。また、京都市左京区の都市エコロジー観測所において社会起業家や環境活動家とともに「自分たちが観測する都市のエコロジー展」を開催した。



Web サイト「都市エコロジー観測所」



授業の様子

Webサイト (<https://ethnography.hus.osaka-u.ac.jp/>) より

◎2 災害ボランティアラボ 担当教員：渥美 公秀

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：能登ボランティア活動／60 人

阪神・淡路大震災 30 年事業として、2023 年度～2024 年度の 2 年間に兵庫県西宮市において、日本災害救援ボランティアネットワークと連携しシンポジウムを計 8 回開催したことをきっかけに、2025 年度は、参加者との双方向のゼミ形式での講座を共催して計 5 回開催した。

開催日：第 1 回：2025 年 7 月 31 日、第 2 回：9 月 1 日、第 3 回：10 月 8 日、第 4 回：12 月 4 日、
第 5 回：2026 年 1 月 8 日

（参加者数：第 1 回：22 名、第 2 回：25 名、第 3 回：33 名、第 4 回：24 名、第 5 回：26 名）

成 果：受講生からは「継続的に参加することで立場の違いの理解が増えてよかった」「話題提供も勉強になったが、受講生同士が話せたのが良かった」などの感想をいただいた。



能登半島地震での災害ボランティア



災害直後の石川県七尾市の避難所の実態報告

NVNAD ゼミ（2025 年 9 月 1 日）「災害救援の現場で実際に起こっていること」

◎3 心理・行動フォーサイトラボ 担当教員：平井 啓

▶ウェブサイト：<https://pbl-f.hus.osaka-u.ac.jp/>

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5件／約80人

内訳：・新神戸駅における実証実験（2025年6月2日～22日）

・日本心理学会第89回大会ワークショップ「心理学のPBLを実践する(2)」
（2025年9月6日、登壇）

・三ノ宮駅での成果発表会（11月27日）

本プロジェクトでは、心理学・行動科学を方法論として社会的文脈における人間の心理と行動のメカニズムを解明し、その変容の方法（フォーサイト）を開発する共創的研究を推進している。2025年度は、連携企業である株式会社JR西日本テクシア・JR西日本新神戸駅・JR西日本神戸機械区の協力のもと、昨年度の調査結果を踏まえて設計した「みどりの窓口の行列解消」に向けた介入プランの大規模な実証実験を新神戸駅にて実施した。



【主要な活動内容】

- (1) 実証実験の最終準備（2025年4月～5月）：ポスター6種（B1・B2・A4サイズ、計30枚以上を駅構内13地点に設置）、モニター投影用動画2パターン、窓口仕切りパネル、窓口列デザイン変更、利用客アンケート、駅員アンケートの設計・制作。
- (2) 新神戸駅における実証実験の実施（2025年6月2日～6月22日）：介入前Aフェーズ（6/2-6/8の7日間）と介入後Bフェーズ（6/9-6/22の14日間）を設定し、駅員質問紙調査、AIカメラによる列人数カウント、改札機通過データ、利用客への質問紙調査（6/13実施）の4種のデータを収集。
- (3) 分析フェーズ（2025年8月～）：収集したデータをもとに、介入による窓口列人数の減少、券売機への誘導効果、利用客の行動変容を検証中。
- (4) 成果発表：日本心理学会第89回大会ワークショップ「心理学のPBLを実践する(2)―運用上の課題とその対処例の共有―」（2025年9月6日）にて、本プロジェクトでのPBL実践事例として成果と運用上の知見を報告。
- (5) PBL教育との統合：2025年度より新設された認知行動工学研究分野（CoBe-Tech、人間科学研究科附属未来共創センター）の大学院生・学部生がプロジェクトに参画し、ゼミ（実験実習）の一環として実証実験の運営・現地調査・データ分析に従事した。

【連携体制】

大阪大学人間科学研究科（教員・学部生・大学院生）／ソニーグループ株式会社・ソニー株式会社（心理学バックグラウンドをもつメンバー）／株式会社JR西日本テクシア／JR西日本神戸機械区／JR西日本新神戸駅

◎4 子どもの安全ラボ 担当教員：中井 宏

子どもの視野の狭さを視覚的に分かりやすく伝えるための啓発ビデオを作成し、安全行動学研究分野のHPに掲載し（<https://app.hus.osaka-u.ac.jp/introduction/prevent-child-injury/> の下部）、安全研修に活用した。

また、大阪公立大学の交通工学者、京都教育大学の教育学者と連携し、自転車安全教育のループリックの作成を進め、これを含めた京都市自転車安全教育婦五グラムは京都市HPに掲載された（<https://www.city.kyoto.lg.jp/digitalbook/page/0000003004.html>）。

さらに2025年4月からは、毎日新聞社が発行する毎日小学生新聞において、第4火曜日に「あんしん術」というコーナーの連載を担当し（2026年2月は休刊日だったため、全11回の掲載）、子どもを取り巻く様々なリスクを取り上げて安全啓発活動を行っている。

この他、以下のような、子どもの事故防止のための活動を進めている。

■委員・講演・研修等

- ・宮崎県教育研修センター 令和7年度学校安全指導者研修会 講師
- ・大阪府教育庁 令和7年度学校安全教室推進事業 交通安全教室 講師
- ・大阪大学医学部保健学科「学校保健学」 ゲストスピーカー
- ・大阪府警察本部・大阪府教育庁「おおさか Safety Bicycle つながるサミット」指導助言者
- ・大阪市ファミリーサポートセンター援助会員養成講座 講師
- ・神戸市立烏帽子中学校防災講演会 講師
- ・神戸市立灘小学校 5,6年生対象特別授業（水難事故予防）講師
- ・株式会社コドモン 保育者研修、保育士キャリアアップ研修
- ・兵庫県西脇市消防団研修 講師 他

■教材等監修

- ・ナブテスコ株式会社主催「自動ドア安全教室」イベント企画アドバイザー、司会
- ・一般社団法人日本ライフジャケット協会運営アドバイザー 他

■メディア報道

- ・NHK 大阪放送局 ほっと関西 子どもの交通事故を防ぐには
- ・中日新聞社 個別登校の利点、注意点は？
- ・読売テレビ かんさい情報ネット ten 自転車交通反則制度について
- ・ABC テレビ おはよう朝日です 火曜日コメンテーター
- ・フジテレビ サン！シャイン 水難事故啓発 他

◎5 老いと死の研究ラボ 担当教員：権藤 恭之

▶ 社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：

ジェロントロジー検定実施2回／受験者12人、日本心理学会公開シンポジウム1件／109人

これまでの個人の加齢を中心としたエイジング研究だけでなく、地域におけるエイジング、特に自治体の健康福祉、高齢者施策に応用可能な、地域や組織そのものの加齢とさらに死のプロセスを考慮したエイジングモデルの構築を目指す。また、これまでディスプリンに縛られエイジングという現象の狭い側面に注目しがちであった教育に関しても、幅広い視点で現象を捉えることができる、研究、教育、そして実践者を養成可能な部局をまたいだカリキュラムを組み立てることを目指した。地域におけるエイジングに関しては、研究フィールドであった朝来市において、健康推進協議会の会長として市の健幸施策に携わり、健幸アプリの選定に関与した。また、教育に関しては、ナレッジキャピタルで開催されている、ジェロントロジー研究会αZに参画し小中高校生の教育を行った。また、大学の授業の一環として、超高齢で活躍する一般の方をゲストとして招き、エイジングに関する新たな視点を学ぶ機会を設けた。

◎6 緒方らぼ 担当教員：玉城 明子

▶ウェブサイト：NEO のむら公式 <https://nomuraneo.wixsite.com/toppage>

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5 件／206 人

- ・愛媛県西予市野村町の緒方蔵等で「がいなんよ大学 in のむら」と名付けた講演会や文化的な活動を 3 年間で 15 回開催した。
- ・毎年、日本酒「緒方洪庵」の醸造・販売を通して、西予市野村町との関係人口の拡大を図った。
- ・大学生を雇用したり、ボランティアとして長期的に加わってもらうことによって、地域の高校生の活動を活性化し、高校卒業後も地域に関わり続けてもらうネットワークを作った。
- ・野村のお土産品の開発に取り組み、地域でできるさつまいもを加工した「の〜むさつまいも」を商品化し、地域のイベントや道の駅で販売し、大学生の交通費・宿泊費に充てる試みを行った。
- ・大学生が地域の農業やイベントなどを手伝い、得た謝礼を大学生の交通費・宿泊費に充てる試みを行った。

NEO のむらの活動については、ウェブサイトを参照。



第 24 講 がいなんよ大学祭

◎7 哲学の実験オープンラボ 担当教員：野尻 英一 <ユネスコチェア連携>

▶ウェブサイト：<https://exphopenlabo.hus.osaka-u.ac.jp>

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：2 件／33 人

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：23 件／290 人

2021 年度スタートアップから活動を継続し、現在の登録メンバーは 150 人を超え、企画運営員は 23 名、教員・学生・卒業生が哲学活動に携わる中規模プラットフォームとして安定した。特に 2025 年度は、教員・学生の連携が活発化し、学外へのアプローチの動きが本格化した。公認プロジェクトは 13 が稼働中である。うち 11 は学生による研究会（ラカンと現代社会研究会、マルクス主義的社会理論研究会、現代思想におけるハイデガー研究会、マイクロアグレッション関連文献読書会、人類学基礎勉強会、美的近代研究会、現代思想研究会、科学哲学の因果性研究会、カント批判哲学研究会、「知のあり方」を共に考える哲学対話、哲学と災害研究会）、2 つは教員による科研費および学際研究会（ジジェク研究会、哲学と神経科学研究会）である。

ラボ公式イベントとしては 23 件が、一般に開かれた学際的、実践的、国際的イベントとして行われた（ニコラ・プリニョ先生による特別講演会、Philosophy of Technology and Imagination、『九鬼周造の人間学：破綻と再建』合評会、人+文哲学研究発表会、障害者の防災講習会と交流会、『創発と物理』研究会、企業インターンシップ株式会社レイ・クリエーション、シンポジウム『“寂しさをなくすこと——

中山間地域の活性化を「さみしさ」から捉え直す』、科学コミュニケーター佐久間 紘樹氏との交流会、哲学カフェ、2025 大阪・関西万博 展示・発表、株式会社アズビルとの哲学対話・交流会、シンポジウム「分断化する社会の中で対話は可能か——ポスト・ソーシャルメディア時代の社会構築」、哲学バー、Youtube 配信など。



哲学カフェ



「寂しさをなくすこと」シンポジウム

◎8 地域の食とプラネタリーヘルス

担当教員：モハーチ ゲルゲイ <ユネスコチェア連携>

▶ウェブサイト：<https://localfoodlab-ph.org/>

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2 件／40 人

本プロジェクトは、地域に根ざした食の探究を通じて、人と環境の双方の「健康」を目指す「プラネタリーヘルス」の実践にむけた学びと発信を行うことを目的に、2022 年度より活動を開始した。「地域の食」を探究するうえで、調査地としたのは瀬戸内地域である。瀬戸内地域は、その自然豊かな景観をもつ一方、高度経済成長期の工場誘致の加速によって工業地帯周辺で環境汚染が深刻化した歴史もあり、環境保全の観点から、日本で初めての国立公園に指定された地域でもある。そして、近年では芸術祭などのイベントも取り入れながら、観光による地域創生が活発になされている。

今年度は瀬戸内地域の 3 か所（岡山県玉野市、香川県直島町・小豆島町）への共創フィールドワークを実施した。共創フィールドワークは、地域の人々（本プロジェクトでは、食に関わる団体や市民）とともに探求し、学びあう形で行われた。今年度は特に岡山県南部の郷土食とされる「ばら寿司」の歴史と変化、また、小豆島のオリーブを中心とした循環型農法を担う「オリーブ」、地域の食の変容と文化背景について議論を重ねた。

■ フィールドワーク参加学生数：7 人

■ 協力団体

- ・岡山県玉野市観光協会
- ・一般社団法人瀬戸内 RE・SORT
- ・一般社団法人全日本伝統文化後継者育成支援協会
- ・一般社団法人デスティネーションセとうち



阪大環境共生セミナー



■ 研究成果

瀬戸内地域の食に関する卒業論文 2 本

■ 研究成果報告ワークショップ

2025 年 2 月 5 日

岡山市南区（福富西地区老人クラブ）にて、本学の学生 4 名が参加して上記の研究成果を報告し、地域の高齢者約 30 人が参加し共に意見を交わすワークショップを実施した。

◎9 全国人間科学系部局の連携と活動継続化 担当教員：西森 年寿

▶ウェブサイト：全国人間科学部局ネットワークウェブサイト

<https://hs-inet-j.humsci-waseda.jp/>

▶学学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1件／100人程度

全国人間科学部局ネットワークを組織し、各大学の人間科学系部局が個別に持っていた情報を集約して人間科学の共通の課題や方向性を明らかにし、ステークホルダーとしての高校生、企業人に向けて、人間科学とは何かということを当事者組織として発信することを目的として、2023年度からは以下の取り組みを行った。

- ・会報第1～3号の企画、編集、刊行
- ・年次総会（第1～3回フォーラム人間科学）の企画と開催（支援を含む）
- ・ロゴマークの作成
- ・ウェブサイトでの情報発信
- ・ネットワーク参加校との運営ルールの策定



年次総会



会報「人間科学」No.3

◎10 縮退社会ラボ 担当教員：村田 忠彦

▶ウェブサイト：<https://www.c3s.srl.shibaura-it.ac.jp/spd/>投稿/

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：ICMEM2024（インドネシア）1件／対面40人、ハイブリッド参加者84人

▶学学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：10件／187人

本オープンプロジェクトは、現代社会を成長発展社会と捉えるのではなく、少子高齢過疎化など縮退を余儀なくされている社会～縮退社会～と捉え、「尊厳ある縮退」をキーワードとして、縮退社会におけるコミュニティの変容過程、および、住民や社会の縮退に対する受容過程を検討し、尊厳ある縮退を実現するための実践的方略を導出する。尊厳ある縮退同好会を拠点として、先行研究を基にした概念整理、事例収集、過疎地、および、都市部の人口減少地域へのフィールドワーク、人口シミュレーションなどを実施してきた。プロジェクト代表者の村田忠彦は、2023年度に開始したJST未来社会創造事業デジタル社会実験プロジェクトにおいて、京都府八幡市、新潟県加茂市を対象としたデジタル社会実験の構築を行なっている。2024年度は両市の市職員と会合を重ね、人口減少に直面する自治体のニーズ把握を行ってきた。2025年度はデジタル社会実験を実施した。

- ・オープンプロジェクト研究会
「JST未来社会創造事業におけるデジタル社会実験の進捗」（4名）
- ・加茂市ワークショップ・会議
2024年3月22日 加茂市施策に関するWS（市職員対象6名）
2024年5月15日 施策の可視化WS（市職員対象6名）



デジタル社会実験（試行）の様子：
京都府八幡市役所
（プロジェクトホームページより）

- 2024年8月2日 加茂市 WS 分析会議（市職員 6 名）
- 2024年12月25日 加茂市 WS 分析会議（市職員 2 名）
- 2025年2月14日 加茂市調査会議（市職員 2 名）
- 2025年4月17日 加茂市デジタル社会実験方針会議（市長・副市長・市職員 8 名）
- 2025年11月19日 加茂市デジタル社会実験リハーサル（市職員 8 名）
- 2025年12月23日 加茂市デジタル社会実験（市民 20 名）
- 2026年3月31日 加茂市デジタル社会実験報告会（市職員 3 名）

◎11 災間社会ラボ 担当教員：宮本 匠 <ユネスコチェア連携>

▶ウェブサイト：<https://omoyai.org/>

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／50 人（内オンライン参加 30 人）

災間社会ラボは、災害が常態化するとともに、それに対応するための社会資源が減少していくような社会を「災間社会」と名づけ、どのような課題がそこにはあるのか、それはどのように乗り越えるのかについて、具体的な活動に参加しながら明らかにする実践的な研究プロジェクトである。本年度は活動フィールドである佐賀県武雄市及び石川県七尾市にて、地域活動や被災者支援活動に参加しながら、災間社会における課題を探索的に明らかにするとともに、それらの課題について、フィールドで活動する支援者や外部の研究者とともに、阪神・淡路大震災から 30 年と重ねたシンポジウム（2025 年 11 月 13 日、



シンポジウム
「ボランティア元年30年を考える」の様子

本ラボ主催）を実施し、議論を深めることができた。シンポジウムでは、災間社会では、他者忌避から外部

からやってくる支援者との協働が難しかったり、そもそも災害が起きたことを否認したり、行政による災害対応の市場化が進むことなどが議論された。



◎12 みんなのフィールドエソロジーラボ 担当教員：山田 一憲

▶社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：15 件／5,142 人

【一般市民向けの研究紹介活動】

- ① 4 月 13 日に京都市動物園で開催された「野生動物学のすすめ」にて、NIFREL と協働して行動観察のワークショップを提供した。2 回のワークショップに 20 組、約 40 名の参加があった。
- ② 学術連携協定を締結している NIFREL（大阪府吹田市）から依頼を受け、コラボイベントを開催した。8 月 21・22 日に NIFREL にて研究体験イベント「生きものの行動観察博士になろう！」を開催した。事前に比較行動学研究室の大学院生が大阪公立大獣医学部の学生と梅花大学心理こども学部の学生と NIFREL 職員に行動観察法を教え、18 名の行動観察チューターの育成を行った。開催日には、チューターが一般の来園者 42 名と一緒に、ワオキツネザルを観察し、データを収集・解析し、行動観察がワオキツネザルの飼育管理や生態の理解に貢献できることを紹介した。
- ③ 8 月 28 日に第 21 回比較行動学研究セミナーをハイブリッド形式で開催した。「イヌの『性格』に関する研究の展開」について麻布大学獣医学部の今野晃嗣氏が講演をおこない、142 名の参

加者を得た。

- ④ 9月27・28日に京都市植物園で開催された「きょうと☆いきものフェス！2025」に参加し、ブース出展とワークショップを実施した。18名がワークショップに参加し、ブースに立ち寄った約100名の訪問者に「行動観察のしおり」を配布し、サル文字や研究ポスターの紹介をおこなった。一般市民の参加者を含む142名の参加者を得た。
- ⑤ 10月18・19日に京都市勧業館みやこめっせで開催された「いきもにあ 2025」にて、ブース出展をおこなった。行動観察体験を提供し、450名を超える訪問者に「行動観察のしおり」を配布して、行動観察と行動解析の方法を紹介した。
- ⑥ 11月1日に島根大学総合博物館で開催された「令和7年度自然史学会連合講演会体験教室」に参加した。行動観察の体験教室を開催し、15名の参加者を得た。
- ⑦ 11月29日に中央大学後楽園キャンパスで開催された「SAGA27（アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い）」にて、ブース出展をおこなった。「行動観察のしおり」を配布して、行動観察体験を提供し、研究紹介を行った。約30名にしおりの配布をおこなった。
- ⑧ 12月27日にオンラインイベント「淡路ザルセミナー：抱っこおんぶ（サルの暮らしのお話いろいろ #2）」を開催し、1925回の視聴数、1094のユニーク視聴者数を得た。
- ⑨ 3月14日にオンラインイベント「研究成果報告会 2026～淡路ザル観察公苑 & 大阪大学・奈良女子大学～」を開催し、一般社団法人淡路ザル観察公苑、株式会社淡路島モンキーセンター、奈良女子大学と協働して実施した。2025年度に実施された卒業研究と修士研究の研究成果を、野猿公苑の管理者、ボランティア、来園者の方々にフィードバックする報告会であった。3625回の視聴回数、2990名のユニーク視聴者数を得た。

【学校や地域団体との連携活動】

- ⑩ 5月16日、6月20日、7月18日、11月14日に、学術連携協定を締結している株式会社海遊館（NIFREL・海遊館）にて、研究会を開催し、比較行動学研究分野の教員と大学院生と海遊館の社員が参加した。ワオキツネザルやネズミフグやカマイルカを対象とした行動観察法と解析手法を大学院生が職員に教えることで、動物の管理と福祉に貢献できる技術の指導をおこなった。
- ⑪ 7月29日に神庭の滝自然公園（岡山県真庭市）において、真庭市勝山振興局と一般社団法人真庭観光局と協働して、岡山県立岡山一宮高等学校の1年生85名を対象としたニホンザルの行動観察実習を大学院生と教員が行った。
- ⑫ 8月18日に神庭の滝自然公園（岡山県真庭市）において、真庭市勝山振興局と一般社団法人真庭観光局と協働して、公立鳥取環境大学 環境学部（教員と学生、6名）を受け入れ、ニホンザルの行動観察実習を大学院生と教員が行った。
- ⑬ 12月19日に淡路島モンキーセンター（兵庫県洲本市）において、一般社団法人淡路ザル観察公苑と株式会社淡路島モンキーセンターと協働して、甲賀市立小原小学校30名を対象とした行動観察会を開催した。
- ⑭ 2026年1月13日に真庭市立勝山小学校の3年生38名を対象にした「サルの事前学習」と「サルの観察実習」を真庭市勝山振興局と一般社団法人真庭観光局と協働して実施した。阪大の大学院生と特任研究員が小学校で事前講習をおこなった後、児童と一緒に神庭の滝自然公園にて実習をおこなった。
- ⑮ 洲本市畑田地区の集落に出没して畑を荒らす野生ニホンザルに対して、本ラボが専門的な被害防除対策を提案して、地域住民や、地域団体と行政と協働して実施した。2025年9月に兵庫県森林動物研究センターが開催した「動物駆逐用煙



火保安教育講習会」に参加して、煙火消費保安手帳を取得した。11月17日に畑田集落のミカンに被害が生じたため、22日から煙火を利用した追い上げを実施した。追い上げの実施以降は、ミカン畑の被害は収まった。2026年2月4日には、当該のミカン畑に電気柵（おじろ用心棒）を設置した。設置には、本ラボの教員と学生4名が中心となって計画を立て、地域住民（上灘地区の連合町内）や、地域団体（一般社団法人淡路ザル観察公苑、株式会社淡路島モンキーセンター）と行政（兵庫県森林動物研究センター、兵庫県淡路県民局洲本農林水産振興事務所、洲本市産業振興部農政課）と大学（兵庫県立大学）からの参加者延べ20名が集まって、一緒に設置作業をおこなった。

◎13 記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ） 担当教員：三好 恵真子

▶ウェブサイト：<https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/>

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4件（長崎訪問：1回、沖縄訪問：2回、写真展開催：1回）／90人（長崎・沖縄での交流活動：40人、写真展：50人）

アジア・太平洋戦争の終結から80年が経過し、戦争体験者の逝去による「ポスト体験時代」へ突入しつつある現在、戦争・戦後体験や記憶の継承は喫緊の課題である。こうした社会的背景の元で、これまで「記憶の継承ラボ」では、長崎、沖縄、福島、水俣等の各地における体験者の「伴走者」として継承活動に尽力する実践者たちに学びつつ、戦時から戦後への連続性を「人々の生きた歴史」として凝視することで、アジア地域史の視座から戦争・戦後体験の共有とその継承の可能性を討究し、さらにはそれらを生活者の思想的営為として未来に切り拓いていく試みに挑んできた。主に今年度は、①ホロコーストの生還者の証言を記録した映画『SHOAH』を巡り諸領域の若手研究者たちが熟議を重ねることで生み出されたブックレットの刊行、②「戦後80年目」の長崎と沖縄におけるフィールドワークならびに現場との対話の深化、③各地の現場で撮影を続けてきた写真の展示とギャラリートークの開催によるプロジェクトの活動成果の発信強化として結実した。以下、本年度の活動内容の概要を具体的に紹介していく。

◆ブックレット『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』刊行

大阪大学人間科学研究科・共生の人間学研究分野（現・福祉と人間学）と「記憶の継承ラボ」の共催にて2024年2月に実施したシンポジウムの総括として、その後の熟議を重ねつつ、2025年7月に大阪大学中国文化フォーラムよりブックレット『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』（中谷 碩岐・瀧口 隆・吉成 哲平編、三好 恵真子監修）の電子版と冊子体を刊行した。哲学を専門とする当時博士前期課程1年である2名の大学院生により企画された本シンポジウムの当初の趣旨は、クロード・ランズマン監督による映画『SHOAH』が提起した「表象不可能性」への学的関心事が起点であった。しかし、2023年10月にパレスチナ暫定自治区のガザ地区を実効支配するイスラム組織ハマスによるイスラエルへの攻撃と、それを契機としたイスラエル軍の応酬が激化し、市井の人々が戦いの犠牲となる中で、シンポジウムの趣旨は、「いま、なぜ『SHOAH』なのか」と参加者一人ひとりへの血肉に迫る問いを投げかける形で色濃く深みを増していったのである。すなわち、本シンポジウムは「表象不可能性」を前にして、あるいはむしろ表象を前にした躊躇を自覚しつつも、ランズマンはそれでも出来事を記録することを選んだのか」という根源的な問いと向き合う若手研究者たちの熱量により生み出された。

本書の第一部には、『SHOAH』が問う出来事の「表象不可能性」と向き合いながら基調報告を行った哲学、減災研究、生活環境論を専門とする若手研究者たちの充実した論考が収録されている。また、第二部では2025年2月に登壇者たちがシンポジウム当日の白熱した議論を振り返りつつ、今日の中

東情勢等も踏まえながら深化させた総合討論を収めた。さらに、第三部では本書ならではの魅力として、当日のシンポジウムに参加したディスカッサントによる示唆に富む論考に加え、若手研究者たちが各々の専門性からシンポジウムに回答した寄稿文も収録しており、世界各地にて今なお戦争の続く現状に対しそれぞれの立場から応えていくことを試みている。本企画を通じて、若手研究者たちが専門分野を超えて対話を重ねる中で見出てきた「未来」に拓かれる重要な意義から我々も多くのことを学びつつ、東アジアの厳しい緊張関係に見舞われながらも、引き続き次世代とともに、地域を超えた連帯に向けての可能性に心血を注いでいきたいと改めて誓うことができた。

◆「戦後 80 年」を迎えた記憶の継承の現場で尽力する実践者たちとの対話

昨年 2025 年はアジア・太平洋戦争の終結から 80 年という節目を迎えたことを念頭に、とりわけ長崎と沖縄においてこれまで戦争・戦後体験の継承活動に尽力してきた実践者たちと東アジアからの留学生を含む学生たちとの現場での交流を深化させることで、「ポスト体験時代」に向かいつつある現在の各地域における模索について貴重な示唆を得た。以下、各地での活動概要をそれぞれ報告する。

① 長崎訪問 (2025/8/8~8/10)

まず、長崎に関しては被爆校舎から原爆体験を伝え継いでいる城山小学校平和祈念館へ、「長崎原爆の日」である 8 月 9 日に合わせて人間科学研究科／人間科学部環境行動学の学生が中心となり訪問し、市内に残る原爆遺跡も丁寧に案内頂くことで、今日の私たちがいかに原爆体験の継承の担い手となり得るのかについて様々な教示を頂いた(写真 1)。参加した学生たちは原爆遺構や被爆遺物に接し、原爆による計り知れない惨禍への衝撃を受け止めていた。他方、被爆直後の焦土に広がっていた匂いや音は被爆者にしか分からず、原爆を生き残った人びとが戦後に抱え続けてきた苦悩は容易には語り得ないものであるという実践者たちの声の重みに、原爆体験との距離の遠さも感受することにもなった。さらには、城山小学校にて举行された第 888 回平和祈念式では、被爆校舎の保存に長年にわたり尽力された内田伯氏(2020 年 4 月に逝去)による「目から消え去る物は、心からも消え去る。原爆の遺構は残すこと、見て感じること、伝えることに意味がある。」という志が次世代へ着実に受け継がれていることを学ぶ貴重な機会も頂いた。以上の訪問を通じ、長崎における被爆の過去が固定化された歴史的知識として継承されてきたのではなく、「原爆が人間に何をなし続けてきたのか」という「<原爆>の人間的意味」を、同地にて記憶の継承に携わる一人ひとりが絶えず受け止め直しながら継承活動が深められてきたという時間の厚みを見出すに至った。



写真 1
長崎城山小学校でのフィールドワーク
(2025年8月、人間科学研究科・吉成 哲平撮影)

② 沖縄訪問 (2025/8/31~9/2, 12/6~12/8)

また、2025 年 9 月及び 12 月には「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」と称され、米軍嘉手納基地の門前町として発展してきた沖縄市の戦後史を見つめ直している沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」(以下、「ヒストリート」)を再訪した(写真 2)。9 月の訪問では、「ヒストリート」の実践者たちの厚意により、沖縄が「復帰」に揺れ動いた 1970 年前後のコザを中心に撮影された写真記録に関する資料調査を実施することが叶った。中でも、ベトナム戦争に翻弄される人びとの暮らしを撮り続けた沖縄出身の写真家である石川文洋氏の写真表現は、当時の沖縄が基地を介してベトナムと直結しているという「戦後」の現実と直面しつつ、反戦平和を希求していった人々の模索と同時に、当時の沖縄の為政者たちが抱えていた苦悩の深さも示唆していると考えられる。これらの写真は、東アジア冷戦体制における様々な戦争との関わりの中で戦後日本社会が形成されてきた過去を改めて照らし出す重みを内包していることが窺えた。さらには、12 月の沖縄市への再訪には人間科学研究科環境行動学の留学生も参加し、沖縄市における戦争・戦後体験の記録とその継承を巡る模索について実践者たちから教示頂いた。



写真 2
沖縄市でのフィールドワーク
(2025年12月、人間科学研究科・吉成哲平撮影)

た。対話を通じて私たちが重要な示唆を得たのは、今日、沖縄戦の体験者のみならず、その後の米軍統治や復帰運動等の「戦後」の時代を経験した人びとの高齢化も進行しており、後世への記録を残す必要性が益々高まっていることを現場の実践者たちが身をもって実感している点である。さらには、沖縄戦後における人びとの経験は、彼ら彼女たちがどの場所において「終戦」を迎えたのかにより大きく異なってきたがゆえに、私たちはそれぞれの地域性を踏まえながら「記憶の継承」という課題と向き合う必要があることも理解された。

◆写真展「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」及びギャラリートークの開催
(2025/7/28～7/30)

このように記憶の継承に尽力する現場での学びの数々をより幅広く社会へ伝えていくため、今年度は写真展を介して現場を伝え、表現することにも挑戦した。すなわち、「記憶の継承ラボ」と人間科学研究科環境行動学研究分野を主催とし、2025年7月28日(月)から30日(水)にかけて人間科学研究科本館1階・インターナショナルカフェにて、写真展「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」を開催した。本展ではこれまで長崎や沖縄、福島、水俣等のフィールドにて撮影を続けてきた写真の展示とギャラリートーク(写真3)を通じて、各地域における戦争と「戦後」の現実と向き合い続けてきた生活者の思想的営為の記憶と現在への連累について、それぞれが自分の立ち位置から考えられることを目指した。会期中は、これまで各地で撮影を続けてきたラボのメンバーである吉成哲平から撮影写真についてのギャラリートーク(各回30分程度)も毎日実施したことで、一枚一枚の写真の背後に広がる人びとが模索の中で脈々と受け継いできた暮らしの歴史を共有することへ繋がり、参加者から好評を博した。とりわけ筆者らが本展に込めた想いは、終戦後も様々な傷跡や語り得ない思いを長年にわたり抱え続けながら人びとが紡いできた暮らしの現実であり、ひいては、それが近現代の東アジアにおける激動する歴史とも密接に結びついてきたことである。こうした願いを踏まえるならば、各々の参加者が自身の生まれ育った地域において感受してきた戦争や「戦後」の経験についても振り返りながら対話する機会に恵まれたことは貴重であった。現在、本展については大阪大学中国文化フォーラムより総括としてのブックレットの刊行作業を進めている。



写真 3
写真展でのギャラリートーク
(2025年7月、ラボメンバー撮影)

◎14 プロジェクト SOUP (Share Our Unique Perspectives)

担当教員：安元 佐織

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4件(うち2件は毎月一回開催)／約100人

「プロジェクト SOUP」は、人間科学研究科の学生に部局内外での多文化交流の場を提供することで、学内での学びと社会を繋ぐ Public Sociology (公共社会学) の実現を目指しています。本年度は、これまでに構築したプロジェクトを発展させることを目標に、人間科学研究科の異なる学年の学生や留学生が中心になって様々な企画を開催しました。

具体的には、①地域高齢者との世代間交流企画@吹田市：



グローバルビレッジ津雲台の高齢者住宅で、毎月1回高齢者との交流企画を実施 ②地域住民との国際交流企画@吹田市：毎月1回英会話教室を実施 ③地域住民との世代間交流企画@伊丹市：2025年11月9日に「若者像」について語り合う交流企画を実施 ④地域住民との世代間国際交流企画@浜松市：2026年3月14日に「イケオジ塾」と称した素敵なおじさん像について語り合う交流企画を実施。様々な研究室の学部生と大学院生（日本人学生&留学生）がアイデアを出し合って作り上げた企画は、地域の方々に大変好評でした。

◎15 Tsunami DRR (Disaster Risk Reduction) Lab. 担当教員：杉本 めぐみ

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：1件/約100人

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4件/約1,000人

2025年12月インドネシア気象庁とOOS締結した。インドネシア共和国アチェ州で自治体をはじめとするステークホルダーが参加し、地元シャクアラ大学の学生も参加する津波防災のための国際プロジェクトに発展した。具体的には、2026年8月大阪関西万博でインドネシア気象庁長官の基調講演で温暖化における女性やマイノリティのための国際シンポジウムを開催した。OOS協定やOOSシンポで来日の際に日本の防災施設を案内。インドネシアでは2004年インド洋津波の襲来高さを再現した津波記念碑を用いた防災意識の喚起のセミナーを複数回、3月インド洋津波記念碑フォトコンテスト等も行った。2025年11月サイクロン・セニョールの被害調査を2026年2月現地気象庁と実施し支援する場所の選定を行った。その結果、2026年度11月ジュネーブで国際シンポジウム開催が決定し、ガジャマダ大学、マンチェスター大学、インドネシア気象庁等と新たな防災プロジェクトを立ち上げることに結びついた。一方で2025年7月福島県大熊町が震災後初めて開催するイベント『科学とくらしのまつりがくま』への出展依頼によりインフラサウンド・センサーを用いた津波防災ブース出展を阪大RCNP等と協力し、阪大生や地元の高校生も手伝い、地元の住民や阪大浜通りインターナショナルサマー学校の学生も見学にくるなどグローバルな活動へと発展させて行くことができた。



◎16 対話で進めるディスアビリティ・インクルージョン 担当教員：中井 好男 <ユネスコチェア連携>

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：1件／17人

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：手話カフェ 17件／各3～14人、
ネイチャアフィーリング 1件／55人、国際シンポジウム 1件／17人、
芸術をたどるろうの記憶／1日目 53人、2日目 69人

2025年度は、①手話カフェ、②ネイチャア・フィーリング、③国際シンポジウム「中国からの留学生の事例から考える留学生支援の現状と課題」④「芸術でたどる一ろうの記憶と今」の4つの実践を中心に活動を展開した。

①手話カフェは、吹田・豊中両キャンパスに加え、オンラインや学外レンタルスペース「生野長屋大学ぼんぼこキャンパス」でも開催した。2年目を迎えた今年度は、単なる手話学習の場としての機能を超え、手話に関心をもつ多様な背景の人々（学生・教職員・地域住民など）が出会い、つながる「地域連携のハブ」としての役割を果たし始めている。

②ネイチャア・フィーリングは、昨年度に引き続き、NPO法人ヘレンケラー自立支援センターすまいるの協力のもと、吹田キャンパスにて実施した。参加者には、すまいる利用者の盲ろう者に加え、大阪府内の自然保護関係の専門家や地域住民も含まれた。共生学系環境共生学講座が管理するコミュニティガーデンでの自然観察や、インターナショナルカフェでの交流を通して、自然を媒介としたDE&Iの実践的可能性について考察する機会となった。

③留学生の送り出しに関わる中国の教育機関の教員と留学生を受け入れている人間科学研究科、および留学生教育に関わるマルチリンガル教育センターの教員との対談を踏まえ、留学の制度・教育的課題について議論した。

④「芸術でたどる一ろうの記憶と今」では、アートや映像を通して、ろう者の歴史や経験を辿る2日間のイベントを実施した。1日目は、絵師の濱田慎一郎による講演と、画家のともぞうによる講演・イラストワークショップを行った。2日目には、ヒゲの校長および沈黙の50年の上映に加え、映画制作に携わった橋詰恭子（大矢暉氏に代わり登壇）と谷進一による講演を実施した。旧優生保護法という制度的暴力や社会的不正義のもとで翻弄されてきたろう者の経験に触れることで、制度の問題と生の現実について深く考える機会となった。



手話カフェ



芸術でたどる 一ろうの記憶と今

◎17 多様性の中のウェルビーイング 担当教員：山田 陽子

今年度は、株式会社博報堂生活者発想技術研究所との連携のもと、感情資本主義社会における仕事とウェルビーイングに関する社会学的な実証研究を実効性のあるソリューションにつなげることを目的として研究プロジェクトを進めた。

これまでに申請者が進めてきた感情資本主義社会に関する学説・理論的研究と、連携団体との共同で進めている計量調査で得られた知見を基盤に、本プロジェクトでは質的・量的調査の双方を新たに展開させることにより、感情資本主義社会における仕事とウェルビーイングに関する論点の洗い出しと社会課題の実効的な解決法を検討した。

具体的には、

- 1) 外資系テック企業と国内テック企業の人事経験者に対するインタビュー調査を実施し、従業員のメンタルヘルスやウェルビーイングと経営がいかに結びつけられているのかについて明らかにした。
 - 2) アメリカのテック系企業で社員のメンタルヘルスとウェルビーイング教育を担当した経験のある禅僧を対象としたインタビュー調査を行い、マインドフルネスと禅の関係性について明らかにすることで、「感情商品」の観点から宗教の商品化について考察した。
 - 3) 全国 20～59 歳の有職者男女 661 名を対象とした「職場における感情に関する実態調査」を実施し、感情資本主義社会について実証的にアプローチした。
- 上記 1) から 3) の調査結果の分析や考察を踏まえて、実効性のあるソリューションについて検討した。



(参考 URL)

https://www.nikkei.com/article/DGXZRSP706360_T20C26A4000000/?msockid=25679003a1b963a2082c873ea00e62a1

◎18 ACE ラボ 担当教員：三谷 はるよ

▶ウェブサイト：<https://acelab.site/>

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：テレビ出演1件／視聴者数 集計不可、イベント2件／約220人

今年度は、「ACE ラボ」のWEB サイトを通じて、子ども期の逆境体験（ACE）に関する学術研究の成果や各種イベントについての情報発信を強化した。また、ラボ公式の社会学連携活動として以下3件を実施した。

① ACE に関する初の全国番組へのラボ代表者出演

2025年5月19日（月）20:00-20:29、20日（火）20:00-20:29

NHK『ハートネットTV』「特集・逆境的小児期体験 ACE（エース）」

<https://www.nhk.jp/p/heart-net/ts/J89PNQQ4QW/episode/te/D1MWKP2ZN3>

<https://www.nhk.jp/p/heart-net/ts/J89PNQQ4QW/episode/te/WXNJJR26742>

② ACE 問題に関する院内集会の開催

2025年10月27日（月）参議院会館にて「緊急集会！ACE サバイバー支援の実現に向けて——孤独・孤立、自死リスクに立ち向かうために」を開催、研究者代表としてラボ代表者登壇

③「わかちあう会」の開催

中井好男先生主催「わかちあう会」に本ラボも協賛し、ACE サバイバー当事者を対象にオンラインで「わかちあう会」を実施

<https://acelab.site/2-28-%e3%82%8f%e3%81%8b%e3%81%a1%e3%81%82%e3%81%86%e4%bc%9a-%e9%96%8b%e5%82%ac%e3%80%90%e5%8f%82%e5%8a%a0%e8%80%85%e5%8b%9f%e9%9b%86%e3%80%91/>



ACE 問題に関する院内集会の様子



「わかちあう会」のポスター

◎19 多文化共生とオープン・ライブラリー・プロジェクト 担当教員：近藤 和敬

▶ 社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：

ワールドカフェ 2 回／各 20 人 哲学対話 4 回／各 10 人

今年度の活動では、まずは、本活動のリサーチアシスタントらの働きにより IKUNO 多文化ふらっとの配架図書を登録し、職員や利用者、および学生に貸出することができる体制を整えることができた。その活動をとおして職員や事務局長からの聞き取りにより、対話の機会を増やしたいこと、哲学対話のようなことをしてみたいなどの希望があることがわかってきた。

そのため、本年度は、まず、大学院の授業と関係づけながら、7 月にワールドカフェ講座とワールドカフェを行った。また、哲学対話と題して、NPO 職員と大学院生との 2 時間の対話を行った。事前準備と関係性の構築からはじめて入念な準備を行い、また当日はその様子を録画した。そのうえでその対話の録画したものを大学院生が編集し、当日はなした職員らと共有し、その効果について検討した。これらの取り組みについて共生学会（第 4 回大会）で、院生と学部生らによる共著のかたちで発表を行い、多くの議論をおこなうことができた。

◎20 発達と教育のためのプレイフル・ラボ 担当教員：萩原 広道

▶ ウェブサイト：https://babylab.hus.osaka-u.ac.jp/playfullab

▶ 国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件／42 人

（Children's Curiosity within Cultural Contexts, 対面 17 人＋オンライン 25 人）

2 年目となる 2025 年度は、セミナーを開催したり、実践の場を訪問したりして、ネットワーク形成や、関係者間の共通言語の創出・整備に注力しました。

- 園・学校訪問：京都・大阪圏の療育や支援施設、こども園等を訪問し、園児や児童およびスタッフと交流しました（6 件）。
- ワークショップ・セミナーの開催：最先端の学術知と実践知を共有し相互理解を深めるためのワークショップ・セミナーを開催しました。今年度は特に、国際的セミナーを実施したり、海外のゲストに講演していただいたりしました（9 件）。
- 遊び場面の解析手法の学習：実際の遊び活動を分析する手法に習熟するために、物体検出モデルについて Python を使った実践的なセミナーを実施しました（1 件）。
- 学会発表・論文化：成果を学術的な形でアウトプットするために、大学教育学会や日本心理学会にて発表を行いました（3 件）。



◎21 複合的災害とジェンダーに関する研究における日豪交流 担当教員：大谷 順子

- ▶国際シンポジウムの件数と参加人数：ISA Forum 1件／25人
(学会参加者は4,800人ほど、企画セッション参加者は25人ほど)
IPA (Plenary 参加者約1,000人 学会参加者1,816人)

これまでの活動を踏まえ、ミラノ大学・メルボルン大学・香港中文大学の教員と大学院生とともに、2025年7月に開催された国際社会学会 (ISA Forum) The 5th ISA Forum of Sociology が、「Knowing Justice in the Anthropocene (新人世の正義を知る)」において企画セッション Women's and Children's Health and Wellbeing Following Disaster: Toward a Human-Right-Based Recovery Framework を開催し、阪大の院生たちが発表し、国際的な場で意見交換を行った。また、2025年大阪で開催される万博において「いのち会議」で発表する「いのち宣言」にアクションプランを寄与するものを先に堂目 卓生特任教授 (総長補佐) や河原 源太教授 (前国際理事) らまた日豪の院生らとともに、「Resilience of Lives Affected By Disasters and Climate Changes: Application of the Inochi Declaration 2025,」として発表した。これは、大阪・関西万博で2025年10月に「いのち宣言」を採択するに向けて、大阪大学を中心に、世界中の研究者と進めてきた議論をもとに、発表するものである。「いのち宣言」とは、いのち輝く未来社会のために人類が為すべきことを人類全体に向かって宣言し、2030年のSDGsの達成、および2030年以後の社会に向けた行動指針を示すものである。日本で開催される国際イベントの成功への波及効果も期待されるものであった。

さらに、IMPACT Plus を得て、2025年9月に、池田 学教授 (大阪大学医学老年精神医学) を大会長として開催された国際老年精神医学会 (IPA) 大会において本メンバーで Plenary を開催した。前日には、院生による能登半島の活動地域を日豪メンバーで視察を行った。

◎22 人に寄り添うペルソナ創生プロジェクト 担当教員：平井 啓

- ▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1件／20人
(受講5人、成果発表会参加15人)

本年度は、汎用人工知能プラットフォーム「Thinkey」を用いたデジタルクロン生成ワークショップを3回実施した。参加者は、人間科学研究科の助教1名、博士前期課程学生2名、博士後期課程学生2名の計5名であり、福祉・発達支援、戦略判断・状況認識、ヘルスケア、コミュニケーション支援、医療安全といった多様な領域を題材とした。第1回および第2回は、90分の講義と180分のハンズオン形式の演習を組み合わせ実施し、参加者は自身の専門性や関心領域に基づき、判断や支援の過程を分解・整理し、それを Thinkey 上でルールとして表現した。これにより、各参加者はそれぞれのテーマに基づく初期版デジタルクロンのルールを完成させた。

また、第3回は成果発表会として実施し、学内外から15名の見学者が参加した。発表会では、参加者による成果発表に加え、画家およびバーテンダーを招いた座談会を行い、芸術やホスピタリティといった感性領域におけるデジタルクロンの可能性について議論した。これにより、従来の専門知識や判断過程のデジタル化に加え、感性や経験に基づく暗黙知のデジタルクロン化という新たな応用可能性を検討する機会となった。



◎23 ライフスキルトレーニングラボ 担当教員：荒木 智子 <ユネスコチェア連携>

▶ 社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：

1 件／25 人（合宿参加総数（企業との連携事業として））

今年度は大学院生、教職員を対象とした「ライフスキルトレーニング合宿」を実施した。合宿は超域イノベーション博士課程プログラムと共催の上、1泊2日で実施し、学生14名、教員8名、外部講師3名が参加した。合宿ではチームビルディングに関わるグループワーク、テコンドー、体力測定等の身体活動、野外炊事などを実施した。学生、教員、外部講師がともに活動を行い、運動や野外炊事などのプログラムを通して、チームにおける互いの強みを共有し、役割分担するなどのチームビルディングに関する活動を行った。また運営には学生も関わった。

合宿での実績をもとに、日常に身体活動を行う機会を増やすべく、キャンパス内でも気軽に実施できる内容としてテニス、ランニング、ヨガ、サーキットトレーニングを主としたプログラム開発の試行を行った。

2025年度の活動については、大阪大学ユネスコチェア連携カテゴリーにも登録された。



運動指導の様子



野外炊事

◎24 地域共生社会を目指す地域福祉プロジェクト

担当教員：齊藤 弥生 / 佐藤 桃子 <ユネスコチェア連携>

▶ 社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：

フードバンクしまねの学習講演会（松江市：2026年3月23日）／約40人

① 地域福祉団体へのインタビュー調査を行った。

- ・島根県内で地域福祉活動団体4件（労協うんなん、労協33、しまね就労福祉事業団、フードバンクしまね）
- ・大阪市内の訪問介護事業所1件（労働者協働組合同つわ）

支援が必要な人に支援を届けるための工夫、事業に関する想い、行政に求める支援などの声を聞いた。

② 豊中市、箕面市の地域福祉団体の方の実践例の調査を行った。

（豊中あぐり、暮らしづくりネットワーク北芝）

③ 上記の結果を高槻市の職員と共有した。（2025年9月、2026年2月）

④ インタビュー調査の結果をフードバンクしまねの学習講演会（島根県松江市）で発表した。（2026年3月23日）



フードバンクしまねの学習講演会



労協うんなんのよりそい号：
高齢者の移動支援用の車



労協うんなんの拠点：
鍋山交流センター

◎25 親と子の育ちのラボ 担当教員：藤野 陽生 <ユネスコチェア連携>

本プロジェクトは、これからの社会を担っていく親と子の育ちを支援するために、地域の親と子どもたち、子育て支援に関わる心理士、福祉施設の支援者などと連携し、大学と社会のつながりを持ち、現場の問題を検証しながら次のステップにつなげていく取り組みを進めるプロジェクトとして立ち上げられた。

地域の自治体と、妊娠期からの支援や児童虐待の予防に向けた知見を得ることや、関係する支援者への調査を行い、自治体における実践を研究の枠組みで取り上げ、成果を還元していく最初の段階として、自治体の関係者との面談を重ね、連携と研究を実施する上での計画作成、倫理的に配慮すべき事項の解決などを行ってきた。

また、NPO 法人との相談を行い、児童発達支援等の取り組みに関わる機会を持つことについて連携の可能性を検討して引き続き連携のための準備を進めてきた。

◎26 文学・演劇研究に基づくアート作品公開プロジェクト

担当教員：福岡 まどか <ユネスコチェア連携>

▶国際シンポジウムの件数と参加人数：当該プロジェクトでの国際シンポジウムの件数はないが、代表者の福岡はインドネシア文化の普及活動と研究活動についてインドネシア共和国政府文化省より「2025 年インドネシア文化賞 Anugrah Kebudayaan Indonesia AKI 2025」を受賞。

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：当該プロジェクト関係者（上演予定の演奏者）と教員の福岡が、2026 年 1 月 11 日に中之島芸術センターにて、「Hibiki, Kotoba, Ma Vol.1」と題する演奏会（中之島芸術センター社会人プログラム）での解説や出演に参画／約 70 人。

2025 年度は、2026 年 7 月に予定されている上演会に向けて上演内容に関する検討とディスカッションを行った。4 月に作品コンセプトについてのディスカッションを行いその検討を踏まえて 7 月に箕面キャンパスにて上演内容についての詳細なディスカッション（参考資料の検討を含む）と上演場所の確認作業を行った。8 月、10 月、11 月、12 月にも上演内容と上演形態についてディスカッションを重ねた結果、影絵上演・俳優劇・楽器演奏にサウンド効果とビデオアートの効果を加えて、実験的創作の影絵上演 experimental wayang を行う方針を決めた。2026 年 1 月には実施体制についての打ち合わせを行い、上演内容についてさらなる検討（台本内容など）を行った。2 月には上演チラシを作成し、記載内容に関する情報交換と確認作業を行った。会場確認においては必要なセッティングや機材などについての検討と確認を行った。

◎27 食と人間科学の学び合いラボ 担当教員：八十島 安伸

▶社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：

市民公開講座 1 件／63 人

自治体打ち合わせ 2 件／対面 6 人・メール等 3 人

研究成果発信・体験型イベント 1 件／一般来場予約者（95 人）

【自治体等における食育への参画】

茨木市や大阪府、大阪市と食に関する連携の協議を始めた。特に、茨木市においては、食育に資する内容を講義する研修会や講演会の実施について打ち合わせた。また、大阪府教育庁とも食に関する研修等についての協議を行っ



た。茨木市では、2026 年 9 月に食育に関する講演会をプロジェクト担当者が行うこととなった。大阪府についても、食育に関する講演を 2027 年 3 月に行うこととなった。

【市民公開講座における社会的インパクト】

2025 年 9 月に日本味と匂学会第 59 回大会にラボとしても共催し、その学術大会における市民公開講座を共催した。その市民公開講座では、4 名の大学教員から、和食のおいしさ、高齢者と食、発達障がい児の食の困りごと、災害復興における食の役割という多彩なテーマで、「食と人間科学」に関して市民に向けて情報発信を行っていただいた。この市民公開講座は、茨木市などの自治体からも市民へ向けて広報を行っていただいた。 <https://jasts59.umin.jp/program.html>

【研究成果発信・体験型イベント】

2025 年 10 月 18 日（土）に開催された大阪大学共創 DAY（全体参加者：約 5000 名）に出展し、食の好き嫌いの脳機構についてのポスター展示と、実際の味覚・嗅覚体験ならびに動物の脳切片の顕微鏡観察という科学体験イベントを開催した。

10. 良かったと思う企画の理由を教えてください。（抜粋）

年齢 居住地	本日のイベントで良かったと思う企画と、その理由を教えてください(最大3つ)	
10 吹田市	味や風味の好き嫌いを科学するラボ	キャンディの味が予想外で、体験して分かったこともあり楽しかった
10 大阪市	味や風味の好き嫌いを科学するラボ	味や風味の好き嫌いを科学するラボ。実際にワークショップに参加して、脳が味の好き嫌いに深く関係しているのがわかった。
30 大阪市	味や風味の好き嫌いを科学するラボ	匂いが強く味覚に影響を与えてることに感動しました、これからも食事の際は嗅ぐことを怠らないようにします
40 吹田市	味や風味の好き嫌いを科学するラボ	普段できない体験ができた
41 西宮市	味や風味の好き嫌いを科学するラボ	実験に参加できたこと
42 豊中市	味や風味の好き嫌いを科学するラボ	子供が興味を持っていたから

大阪大学共創 DAY でのアンケート結果



大阪大学共創 DAY での様子

4 研究事業

◆4.1 研究会

未来共創センター「テーマ研究会」

未来共創センターでは、毎年テーマを1つ選び研究会を実施しています。2025年度は、テーマ研究会の代わりに、未来共創センターと共生学系の共催で講演会を企画しました。「人間と環境」をテーマに人々と生態系の共生のあり方を探ることを目的としました。講演会の開催報告は、ジャーナル『未来共創』第13号の「特集」に掲載されています。2025年度のイベントと講演者は以下の通りです。

第17回共生学コロキウム「分断と対立を超えて ―激動する国際社会と人間・環境・未来―」

- 堀江 正彦（元外務省参与・地球環境問題担当大使）

「気候変動に関する国連外交交渉～現下の世界情勢において何が求められるのか？～」

- 鈴木 雅和（筑波大学名誉教授）

「被爆樹木の生存戦略と人類の未来」

◆4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊

2025年度はジャーナル『未来共創』第13号を発刊しました。本誌の前身である『未来共生学』は、2012年に始まった文部科学省博士課程教育リーディングプログラム「未来共生イノベーター博士課程プログラム」のジャーナルとして創刊されました。ジャーナル『未来共創』第13号には論文1本、特集7本（特集報告7本）、研究ノート2本、報告4本が掲載されています。特集「人間と環境」では、人々と生態系の共生のあり方について、その具体的な実践と意義に関する報告をご寄稿いただきました。

ジャーナル『未来共創』第13号

目次

発刊にあたって 西森 年寿

＜論文＞

他者の意見に左右されるのは自信の無さからか ―自尊心と説得されやすさの関係の検討―
..... 武田 拓海・三浦 麻子

＜特集：「人間と環境」＞

特集「人間と環境」にあたって ―人間科学が問いかけるもの― 佐伯 いく代
共生学コロキウム「分断と対立を超えて―激動する国際社会と人間・環境・未来―」開催報告
..... 佐伯 いく代・坂口 真康・徳永 恵美香・上野 隆弘
地域の食から考える環境変化 瀬戸内フィールドワーク実習より
..... 木村 友美・河本 昇磨・竹中 光・筒井 愛紗・中村 すずらん・
松並 和嵯・吉岡 花恋・モハーチ ゲルゲイ

自然を感じてつながろう

―大阪大学吹田キャンパスでのネイチャ・フィーリング自然「感」察会―
..... 佐伯 いく代・中井 好男・石田 唯・塚本 薫平・坂口 真康・モハーチ ゲルゲイ・
徳永 恵美香・Mariam Likokeli・徐 朶朶

盲ろう者の支援活動における未来共創 石塚 由美子・山崎 初江
フィンランド南部の保護地域における自然ツーリズムの特徴 河本 昇磨
共生学コミュニティガーデンの現在と未来に向けて 平木 雅
第9回阪大環境共生セミナー「動物の感情推定技術のE L S I」の概要報告：
動物―技術―社会の関係性を横断的に捉える異分野間研究の取り組み―
..... 太田 貴大

＜研究ノート＞

ポストコロナルの視点から省察する知・権力・自己―unlearnの試み
..... 北山 夕華・岸本 直子・葉上 千紘・朴 貴禮・宮内 裕大・足立 愛実・玄 紀雲
大阪・関西万博を経てトイレ内での生理用品設置に対する社会の意識は変化したのか
―オンラインの比較調査より― 付 若琳・原 聡美・三浦 麻子・杉田 映理

＜報告＞

Resilience Galleries: Exploring the Pregnancy, Childbirth, and Child Raising Experiences of
Foreign Women in Japan through Art and Storytelling
..... Kate Nakasato・Yuki Shimamura・Yukari Enoi・Gergely Mohacsi
横合地区：心の中の遊園地―イベントとしての「地産地活」―
..... 朝木日力格・米田 沙由葵・LIN YINA
野田村と海とのつながり―野田村の海文化の意味と存続―
..... Yang Luke・Shangguan Shicong・中村 早希
復興14年目における商店街の課題と可能性 ―野田村でのフィールドワークを通じて
..... 周 天燁・侯 岳彤・邱 心越
編集後記 上野 隆弘

5 教育事業

◆5.1 未来共創センター担当授業

本年度、未来共創センターは下記の授業を実施しました。

(1) フィールド科目

【学部】未来共創フィールド実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】未来共創フィールド実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅠ 春～夏学期

【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅡ 秋～冬学期

令和7年度は阪大福島大熊拠点および宮崎県内で南海トラフ臨時情報についての調査等のフィールド実習を行いました。

(2) 実践型学修活動

【学部】人間科学学際実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】人間科学学際実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅰ 春～夏学期

【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅰ 春～夏学期

【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅱ 秋～冬学期

(3) 人間科学学際研究特講

人間科学研究科の学際研究特講において、6時間分の授業を担当しています。学際事例紹介として福島浜通りスクールに参加した学生の経験を聞いたり、医学研究科とDMAT講義とAED実習を行ったりしました。

(4) 全学教育推進機構（総合）「大阪の防災」

令和6年度春学期に全学に開講した「大阪の防災」では1回生から吹田の工学研究科M1と学年も様々な学生28名が履修しました。阪大ASEANキャンパスのプログラムで来日したASEANの大学生約15名とともに、神戸市にある人と防災未来センターの見学を5月に実施しました。大阪関西万博オランダパビリオンのシンポジウムに参加など海外の来学者と一緒に活動もしました。



◆5.2 『私の一冊』の発行

人間科学研究科の教員が、学生に読んでもらいたい本を一冊ずつ紹介する『私の一冊』を、当センターのウェブサイトに掲載しています。私の一冊は、必修科目「人間科学概論」で使用され、学生たちは掲載された書籍を選んでレポートにまとめて授業で発表しました。本を通じて学生と教員がつながるきっかけとなりました。詳細は、当センター公式ウェブサイト『私の一冊』をご覧ください。

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/about/recommend/>

発行
大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2
2026 年 7 月 10 日

お問合せ先
附属未来共創センター
E-mail: mirai-kyoso@hus.osaka-u.ac.jp

制作
マツモト株式会社



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 **未来共創センター**